

# 史跡 武田氏館跡IX

平成12年度大手馬出土壘・主郭部・御隠居曲輪南、  
平成12～13年度無名曲輪、試掘調査概要報告書

2002

甲府市教育委員会

## 序

年月の流れは早いもので、甲府市教育委員会が史跡武田氏館跡整備活用委員会を設置し、武田氏館跡の学術発掘調査に着手してから、7年になります。

この調査は、近世以降に宅地や耕地、境内地として開発された史跡指定区域内に、武田氏三代の時代の遺構がどの程度残っているのか確認することを大きな目的としておりましたが、幸運にも保存状況が良く、武田氏の築城技術や居館の移り変わりを知る上で多大な成果をあげることができ、喜ばしい限りでございます。

本市ではこうした調査成果を一般市民に公開すべく、昨年10月13・14の両日に、山梨県考古学協会と共催してシンポジウム「武田系城郭研究の最前線」及び見学会を開催しましたところ、市民はもとより全国各地の城郭研究者からも申込みが相次ぎ、240名を超える参加者を記録することができました。このことは、武田氏館跡発掘調査への関心が、全国的に高まっている状況を物語っているのではないのでしょうか。

本書には、昨年度に実施した大手馬出及び無名曲輪<sup>うまだし</sup>の発掘成果を収録致しましたが、古絵図に描かれていない堀や土塁の痕跡が検出され、また、武田氏滅亡後の館の再整備状況が具体的に把握されるなど、貴重な学術データが提示されております。

最後に、本書が史跡整備事業にとどまらず、中世城郭の研究やまちづくり、教育など多方面にわたって活用されますよう切にお願い申し上げますとともに、発掘調査に御指導と御協力を賜りました関係各位に、心より感謝申し上げます次第でございます。

平成14年2月

甲府市教育委員会

教育長 金 丸 晃

## 例 言

1. 本書は山梨県甲府市古府中町・屋形三丁目・大手三丁目地内に所在する国指定史跡武田氏館跡の、平成12～13年度に実施した整備基本構想・基本計画策定に関わる事前の試掘調査、及び暫定整備に伴う事前の試掘調査の概要報告書である。
2. 本館跡は、昭和13年（1938）に国史跡の指定を受けており、文化庁・県教育委員会・史跡武田氏館跡調査団の指導の下、甲府市教育委員会が主体となって調査を実施した。調査経費は国・県の補助金の交付を受けている。
3. 本書に関わる試掘調査の担当は伊藤正彦・望月小枝であり、対象地区・調査面積は以下の通りである。

御隠居曲輪	30.3㎡
主郭部	107.5㎡
大手馬出土塁	190.7㎡
無名曲輪	130.8㎡
4. 本書の編集・執筆は、目黒 秀（文化芸術課長）を責任者とし、伊藤正彦が行った。
5. 本書の挿図は林 久美子・望月小枝が作成した。
6. 本書に関わる出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。
7. 発掘調査及び報告書作成に際して次の機関及び諸氏からご指導、ご協力を賜った。厚くお礼を申し上げる次第である。

文化庁文化財部記念物課      山梨県教育委員会学術文化財課      武田神社  
伊藤正義      磯貝正義      小野正敏      北垣聰一郎      清雲俊元      笹本正治  
鈴木 誠      萩原三雄      宮武正登      八巻與志夫      (敬称略)

## 凡 例

1. 本書に掲載した遺構番号は、調査現場において付したものである。
2. 遺構名は各遺構の形状・検出状況に応じ、調査現場において付したものである。
3. 全体図、遺構・遺物実測図の縮尺は図中表示した通りである。
4. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示し、単位はmである。
5. 報告書中の方位は磁北を示している。
6. 写真図版の遺物番号は挿図中の番号と対応している。

発掘調査参加者

(一般)

雨川	宮口	英格	郎一	池岸	谷本	富美	上子	金北	井原	いく	代子	金倉	子田	利勝	雄子
栗木	田木	宏義	一一	小鈴	池木	孝正	苗男	坂武	本井	洋し	のふ	佐中	田村	孝袈	昇一
末長	澤道	晴歌	光雄	花本	曲道	敬政	文子	樋望	井口	美知	子進	中古	屋月	宏	男美
本渡	辺		子茂				清		月	貴美	子	望			

(信州大学)

長田 純佳 高平 香理

(都留文科大学)

浅木 一 希 金 子 正 川 中 裕 二 野 沢 南海子  
法 月 麻友美 林 雅 彦 力 武 浩 史

(東京大学)

斎藤 拓 弥 酒 井 由 梨 佳 佐 藤 雄 基 辻 畑 圭 亮  
初鹿野 博 之 松 本 貴 智 欠 野 奈 苗

(東京理科大学)

片岡 薫 香

# 目 次

序  
例 言  
凡 例  
日 次  
挿 図・表 目 次

## 第 1 章 御隠居曲輪南

第 1 節 調査概況	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	1
第 2 節 調査の成果	
1 土 層	1
2 出土遺物	1

## 第 2 章 主郭部

第 1 節 調査概況	
1 調査に至る経緯	4
2 調査地の概要	4
3 調査の方法と経過	4
第 2 節 調査の成果	
1 基本層序	7
2 遺構と遺物	7
第 3 節 小 括	8

## 第 3 章 大手馬出土壘

第 1 節 調査概況	
1 調査地の概要	9
2 調査の方法と経過	9
第 2 節 調査の成果	
1 基本層序	9
2 遺構と遺物	10
第 3 節 小 括	27

## 第 4 章 無名曲輪

第 1 節 調査概況	
1 調査地の概要	48
2 調査の方法と経過	48
第 2 節 調査の成果	
1 基本層序	48
2 遺構と遺物	49
第 3 節 小 括	58

## 挿図目次

図1	年度別調査範囲	
図2	スポット公園暫定整備図	2
図3	トレンチ図・出土遺物	3
図4	調査区平面図・セクション	5
図5	A-2グリッド平面図・セクション、出土遺物	6
図6	調査地点地形変遷図	8
図7	大手馬出土墓トレンチ1平面図・セクション(1)	11~12
図8	大手馬出土墓トレンチ1平面図・セクション(2)	13
図9	大手馬出土墓トレンチ1平面図・セクション(3)	14
図10	大手馬出土墓トレンチ1平面図・セクション(4)	15
図11	大手馬出土墓トレンチ2平面図・セクション	17~18
図12	大手馬出土墓トレンチ2・3平面図・セクション	19~20
図13	大手馬出土墓トレンチ4・5平面図・セクション	21
図14	1号石墓・1号溝・3号石列石横側面図	23~24
図15	1号堀推定範囲	28
図16	集石状遺構・2号溝平面図・セクション	29
図17	3~5・8・10号溝平面図・セクション	30
図18	6・7・9号溝、1号土坑平面図・セクション	31
図19	2・3号土坑、ビット1~7・11平面図・セクション	32
図20	ビット8~10、18~23平面図・セクション・エレベーション	33
図21	掘立柱建物平面図・セクション	34
図22	大手出土遺物(1)	35
図23	大手出土遺物(2)	36
図24	大手出土遺物(3)	37
図25	大手出土遺物(4)	38
図26	大手出土遺物(5)	39
図27	大手出土遺物(6)	40
図28	大手出土遺物(7)	41
図29	大手出土遺物(8)	42
図30	無名曲輪トレンチ1平面図・セクション	50
図31	無名曲輪トレンチ2・3平面図・セクション	51~52
図32	無名曲輪トレンチ4平面図・セクション	53~54
図33	無名曲輪変遷推定図	59
図34	無名曲輪出土遺物(1)	60
図35	無名曲輪出土遺物(2)	61
図36	無名曲輪出土遺物(3)	62
図37	無名曲輪出土遺物(4)	63
別添	史跡武田氏館跡大手馬出地点平面図No.1	
別添	史跡武田氏館跡大手馬出地点平面図No.2	

## 表目次

表1	御隠居曲輪出土遺物観察表	1
表2	主郭部出土遺物観察表	7
表3	ビット一覧表(大手馬出土墓)	26
表4	大手馬出土墓出土遺物観察表	43~47
表5	ビット一覧表(無名曲輪)	56
表6	無名曲輪出土遺物観察表	64~67

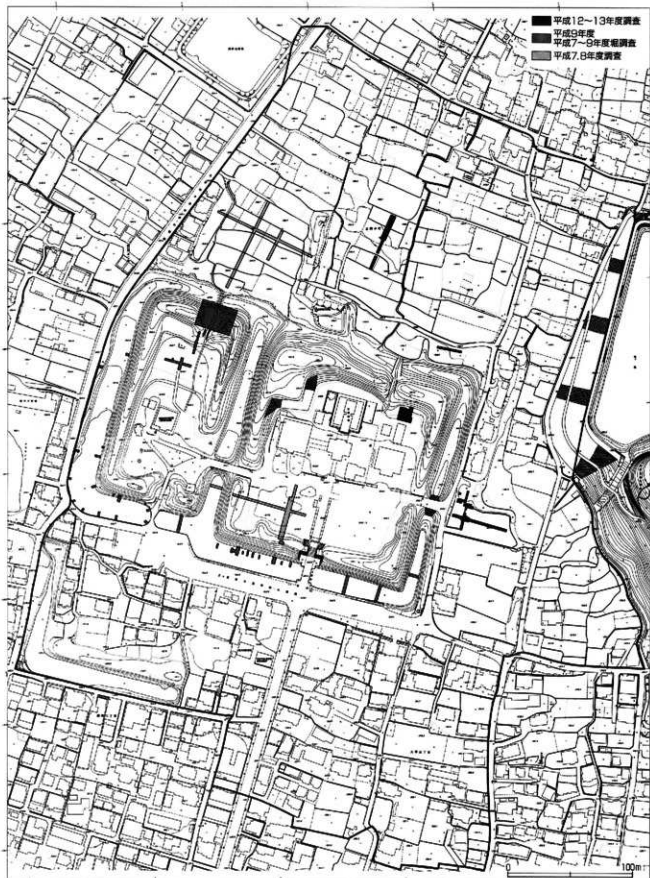


図1 年度別調査範囲

# 第1章 御隠居曲輪南

## 第1節 調査概況

### 1. 調査に至る経緯

平成11年度、甲府ロータリークラブより甲府市に、創立50周年記念事業として史跡武田氏館跡公有地の一角をスポット公園として暫定整備し、寄附したい旨の申し出があった。甲府市教育委員会はこれにあわせ、史跡公有地の美観形成と活用を推進するため、平成12年度にスポット公園予定地の西側隣接地の暫定整備と、武田神社北側公有地一帯への砂利敷き散策路の設定を計画した。御隠居曲輪南側に位置する当該地は、現在策定中の整備基本構想原案において修景地区にゾーニングされているため、あくまで暫定的な整備であること、史跡景観に調和した整備内容とすること、地下遺構に影響を与えないことなどが現状変更許可の条件に付された。暫定整備に先立ち試掘調査を実施し、遺構の有無と文化面の確認を行った。

### 2. 調査の方法と経過

平成12年7月、ミニ公園西側隣接地約400㎡を対象として試掘調査を行った。公有地化の前段階で対象地全体にわたり土砂や人頭大の礫が廃棄されている状況であり、暫定整備計画では一部整地を施すが、現状地形を生かしたまま盛土し、整備することとした。対象地内には幅1.5m、長さ25mのトレンチを設定し、重機と人力によって掘り下げた。予想以上に盛土されていたため排土処理が困難となり、一部のみを掘り下げ、土層堆積・文化面の確認を実施した。

7月27日より調査を開始し、記録図面の作成、及び写真撮影後の8月4日に埋め戻している。引き続き暫定整備と散策路の設定工事を行い、9月27日には御隠居曲輪南スポット公園のオープニング式を挙行し、散策路の渡り初めを行っている。

## 第2節 調査の成果 (図3・表1)

### 1. 土 層

対象地全体にわたり東側から西側にかけて、土砂や人頭大の礫が廃棄されている状況であり、建物解体にともなうガラや礫が多数混入する盛土が厚く堆積していた。その下層に灰色土・黒褐色土が堆積し、灰色土までが盛土と考えられる。盛土層は、東側で1.28m、西側では0.5mとなり、黒褐色土以下が文化層となる。

### 2. 出土遺物

全ての遺物が盛土層から出土しており、建物解体にともない混入したものであろう。2点のみを図化している。

表1 御隠居曲輪出土遺物観察表

( ) 出土位置

図号	出土位置	種別・器種	法 量 (cm)			部位	観察所見 (調整・文様・その他)	胎土	色 調	備考(時代等)
			口縁	底径	器高					
3-1	一括	磁器 皿	(14.8)	(8.2)	(4.3)	口縁 -底面	蛇ノ目高古	密	灰白色	
3-2	一括	磁器 碗	(9.0)			口縁 -体部		密	灰白色	



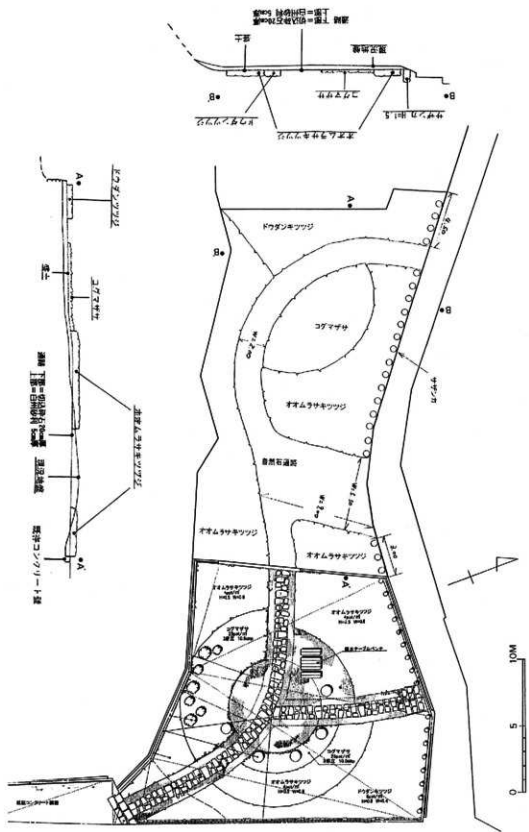
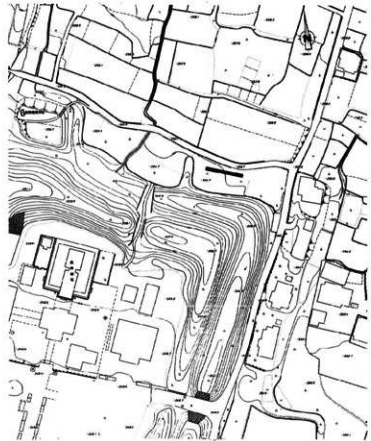
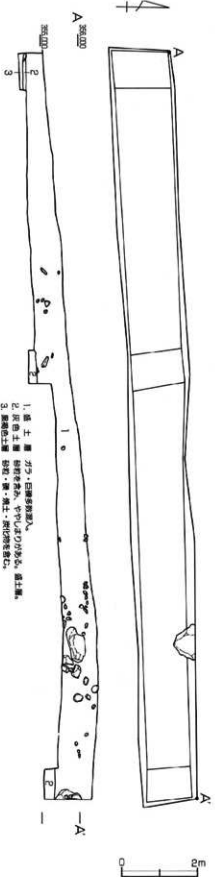
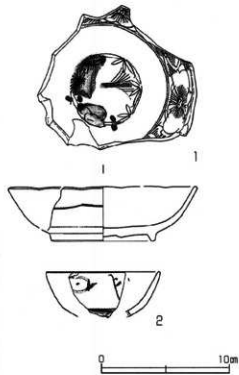


図2 スポット公園暫定整備図(会議資料より)



トレンチ位置図 (S=1:2000)



- 1. 粘土層 灰・白磁器破片
- 2. 灰褐色土層 磁器破片、平片土の破片、磁土層
- 3. 黒褐色土層 砂質・黄土・灰の混在土

図3 トレンチ図・出土遺物

## 第2章 主郭部

### 第1節 調査の概況

#### 1. 調査に至る経緯

平成7年から実施している史跡武田氏館跡整備基本構想・基本計画策定に関する、基礎資料収集を目的とした試掘調査の一環である。平成11年度までの調査成果は『史跡武田氏館跡発掘調査報告書』Ⅲ・Ⅳとしてすでに刊行している。平成12年度は主郭部北東隅・大手馬出土墓を、平成12～13年度にかけて無名曲輪の各地点を調査した。調査地点の選定に際しては、史跡武田氏館跡調査団会議に諮り、検討・承認を経ている。

#### 2. 調査地の概要

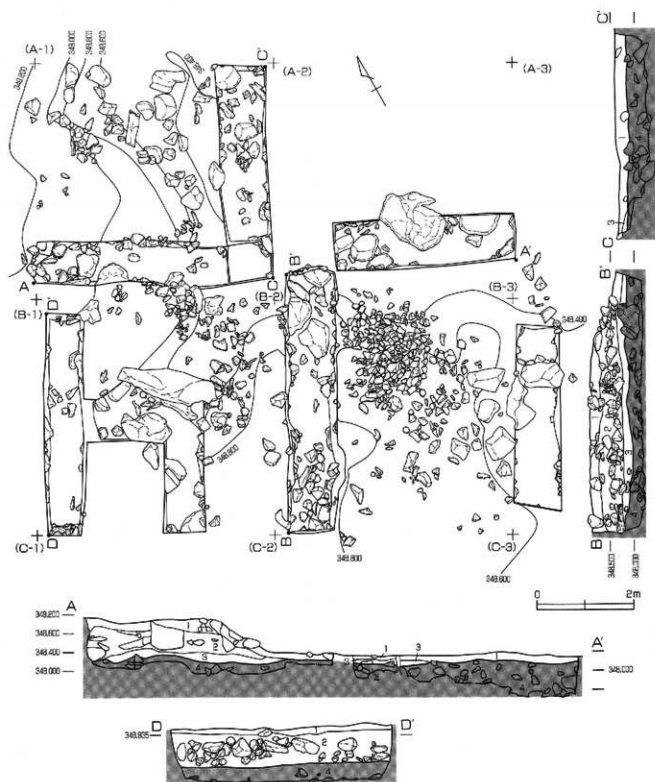
主郭部は、二町四方となる方形の郭で周囲に土塁と堀が巡る。現在、郭内は平坦化しているが、近世の絵図によると石塁により何区画かに区分されており、『甲斐国志』は「東曲輪」・「中曲輪」と、大きく東西に二分して呼称している。この石塁は武田氏滅亡後、加藤光泰によって天正19年から文禄元年の間に築かれたものであり、これまでの調査により東西方向に築造された石塁の基底部を確認している。また、郭内は自然地形の影響のため武田氏の時代から南北軸で三段程度の段構造となることが判明している。

調査地点は、主郭部（東曲輪）の北東隅に位置し、北側郭への出入口口に隣接する。この出入口口は、各種絵図では石塁などの表現が見られ、外柵形虎口と内側にL字状に折れた土塁が描かれる。永禄年間の主郭部の建物配置を描いたときれる「武田信玄公屋形図・伝来之絵図」（尊経閣文庫・他所蔵）は、この地点に「毘沙門堂・不動堂」などを描き、「甲州古城勝頼以前図」（恵林寺所蔵）には、「毘沙門堂前」・「立石アリ」の注記がある。

主郭の北東隅に位置し、絵図などの記述から宗教施設等の存在が予想され、高さ約1.5mの立石も存在するなど、「甲州古城勝頼以前図」の注記と符合していた。調査前、この地は径10mほどの窪地となり、立石の周辺は一面に礫が散乱している状況であった。

#### 3. 調査の方法と経過

主郭部調査は、平成12年7月27日から開始している。任意に5mグリッドを設定したのち、基本土層を確認するため各グリッドにトレンチを設定し、人力で掘り下げを行った。各トレンチの土層堆積状況から、調査地点一帯がすでに大きく削平されている可能性が窺われ、8月後半には土塁基底部を確認するため、新たにトレンチを延長して調査を続けた。この間、地形平面図の作成も並行して行い、11月13日にいったん調査を終了している。他の調査地点と並行して調査を行ったため中断を挟みつつ実施したが、12月19日に写真測量を、12月20日には調査団会議を開催し、現地説明を行っている。川砂・土のうなどにより養生処置を行ったのち、重機で埋め戻し、12月28日に調査を終了した。



1. 黄褐色土層 赤土・腐植土、砂礫・小碎石を含む。
2. 深褐色褐色土層 多数の境ごともコンクリート片・ガラスびんが混入する。腐土層。
3. 明茶褐色土層 粉粒・微石を含みしめりなし。腐土層。
4. 灰褐色褐色土層 汚土

図4 調査区平面図・セクション

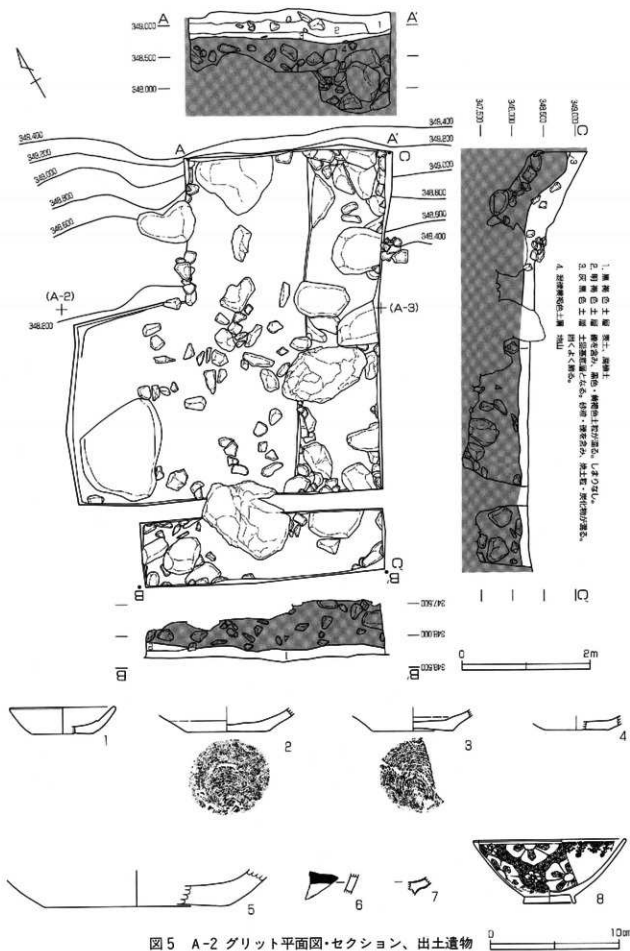


図5 A-2 グリッド平面図・セクション、出土遺物

## 第2節 調査の成果

### 1. 基本層序 (図4・5)

前述したように、調査地点一帯は径10m程の窪地となり、コンクリート片も混じる礫が一面に散乱している状況であった。周囲から盛土されている可能性が指摘され、トレンチの土層堆積状況からも遺物などが混じる文化層は確認できず、地山上にガラス瓶や多量の礫が混入する土砂が堆積していた。すでに遺構面が大きく削平されていると判断したため、新たに北土塁までトレンチを延長し、土塁基底部を検出することによって文化層の有無を確認した。土塁基底部は現状地盤より約0.5m上層で確認でき、地山上から盛土されていることが判明した。土塁裾部にまで削平が及んでいることや、包含層及び生活面がすでに失われていることが確実となった。古絵図の注記と符合する立石も後世の盛土中に存在することが明らかとなり、地山を掘り込んだ痕跡、他の石材と組み上げている状況など全く確認できなかった。

### 2. 遺構と遺物

#### 北土塁 (図5・表2)

北土塁の規模は、高さ約9m、幅約23mを測り、北側に幅16mの空堀がある。調査の過程で現状地盤より約0.5m上層から土塁の基底部を確認した。焼土・炭化物が混じり、厚さ約10cmに固く叩き縮められていた。地山上から構築されていたが、地山を整形した痕跡は確認できなかった。

土塁から出土した遺物は2点(図5-5・6)を確認した。どちらも基底層から検出している。5は捏鉢あるいは播鉢の底部片であり、いわゆる「在地系」と呼ばれるものである。6は瀬戸美濃天日の小片である。体部下半のみであるが、大窯1段階であり、外面下半は露胎となる。他はトレンチ掘り下げに際して出土した遺物である。1のかわらけ、7の青磁皿は土塁裾部から出土したものである。表土付近からの出土であるため一括遺物とした。2~4のかわらけ、8の磁器碗は盛土からの出土である。混入遺物であることは明らかであるが、かわらけは戦国期の所産、磁器碗は近代以降の所産であろう。

表2 主郭部出土遺物観察表

( ) 復元値

図番号	出土位置	種別・器種	法 量 (cm)			部位	観察所見(調整・文様・その他)	胎土	色調	備考(時代等)
			口径	底径	器高					
5 1	A-2G	土器 かわらけ	(8.2)	(5.0)	(2.1)	口縁-底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い赤褐色	
5 2	A-1G	土器 かわらけ			(6.4)	底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い橙色	
5 3	B-1G	土器 かわらけ			(6.4)	底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い橙色	
5 4	B-1G	土器 かわらけ			(5.0)	底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い褐色	
5 5	北土塁	土器 捏鉢(?)			(14.4)	底部		やや粗	棕色	
5 6	北土塁	瀬戸美濃 天日宗陶				体部	外面体部下半露胎	やや密	胎土/灰白色糖/黒褐色	大窯1
5 7	A-2G	青磁 皿				底部	付付無糖	密	胎土/灰白色糖/緑灰色	
5 8	A-1G	磁器 碗	(11.8)	(4.2)	(5.0)	口縁-底部	付付無糖、型紙摺	緻密	灰白色	

### 第3節 小 括

調査地点一帯は、絵図などの記述から宗教施設等の存在が予想され、注記と符合する立石も存在する状況であったが、土塁裾部にまで削平が及び、包含層及び生活面はすでに失われていることが判明した。

当初の予想に反して、館廃絶後の、特に神社建設を契機とした土地改変の状況が明らかとなった。廃絶後、館跡は概ね三段階程の改変を受けて今日に至っている。(図6)

I期、館廃絶後から武田神社建設までとする。

現在、主郭の北西隅に犬守台が存在する。土塁のコーナーを利用して東・南面のみに石積がみられる。隅角部は大きく崩落し、館廃絶に際しての破城の痕跡と推定される。他にも、廃絶時にこうした改変が加えられていることは予想されるが、それらは構築物に対してのみであり、郭内に限り土地に対する改変は少ないと考えられる。江戸時代を通じて館跡の利用は「甲斐国志」などから断片的に知ることができる。主郭部は「法性大明神ノ小祠ヲ置」いて祭る空間となった。主郭部・西曲輪は「松樹草荊の間」・「竹林茂密セリ」といった村人もめつたに踏み込まぬ空間であり、村の共有地とも言い得る状態であったのに対して、梅翁曲輪・味噌曲輪・御隠居曲輪などの周辺部は「畠トナレリ」と記され、すでに開墾され個人所有の対象となっている。土塁と堀によって囲まれた空間とその他では、明らかに異なる土地利用が見られる。

II期、館跡は大正8年の神社建設を契機に劇的に変化する。

土塁と堀によって囲まれた空間であった郭内は、開放された空間へと変化する。南土塁の中央は崩され、新たに参道の石段が設けられた。三段程度の段構造であった郭内は北側を削平して南側に盛土することによって平坦化され、何区画かに区分していた石塁は崩され、あるいは埋められた。今回確認した北土塁の裾部から始まる深さ50cmの削平はこの時の痕跡である。調査時、数石に削岩機の痕跡が確認された。地山に入っている状態で、上部のみ削られており、大がかりな造成であったと推定できる。

III期、昭和40年代の宝物殿建設時と考えられる。

この時期、館跡に宝物殿・社務所などコンクリート工法による建物が建設される。今回の調査地は宝物殿の背後に位置しており、削平後に行われた盛土は、宝物殿建設にともなう整地、基礎掘削時の建設残土と推定できる。盛土が、南・西方向から行われたため、結果的に径10m程の窪地となり、周辺一帯に礫が散乱する状況になったと推定される。こうした過程を経て、コンクリート片、ガラス瓶、多量の礫が混入し、今日の状態となっている。

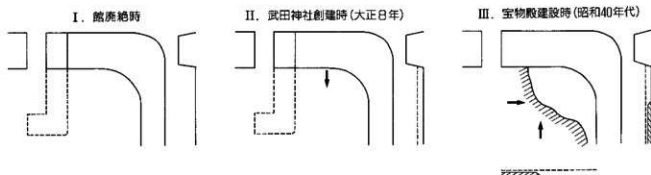


図6 調査地点地形変遷図

# 第3章 大手馬出土塁

## 第1節 調査概況

### 1. 調査地の概要

主郭大手土橋の東には馬出土塁があり、さらにその東を総堀が囲み、館の東端を画している。『甲斐国志』は、「端門ノ前ニ馬出シノ塁アル」と記し、総堀についても「御所堀ト云アリ相川ノ水ヲ引キ外郭ノ溝ニ湛ユ」と記述する。各種古絵図の中で、大手馬出土塁と総堀を記載する絵図は「諸国古城之図」（広島市立中央図書館）・「府中古城図」（静嘉堂文庫）など数点であるが、馬出土塁はいずれも鍵形の形状に描かれている。石塁として表現されるものが大部分であり、注記される規模は長さ20間（約36m）から13間（約23m）まで様々である。

現状、馬出土塁は高さ約2m、長さ20m、幅10mの一字形となり、その周囲に石積を施し、周辺より一段高い畑地として利用されていた。総堀との間に形成される土塁前方の空間は東西約47m、南北約22mの方形となり、水田として利用されていた。

### 2. 調査の方法と経過

調査は、平成12年7月27日から開始している。馬出土塁から総堀までの空閑地も含め、幅2m、長さ45mのトレンチを土塁に直交させて設定した。土塁部分は表土から人力により、それ以外は水田床土まで重機により掘削し、以下を人力によって掘り下げて調査を行った。部分的に遺構の規模を確認するため、9月以降トレンチを拡張、あるいは新たに設定して調査を続けた。12月19日に写真測量を、翌20日には調査団会議を開催し現地説明を実施している。川砂・土のうにより養生処置を行ったのち、重機で埋め戻し、12月28日に調査を終了した。

## 第2節 調査の成果

### 1. 基本層序

土塁部分は厚さ約0.2mの表土が覆うのみであった。土塁東側の空間は、水田として土地利用されていたため耕作土・床土、さらに水田造成にともなう盛土が確認され、遺構確認面は地表下0.4～0.7mにある。盛土は、北東から南西方向、及び東側の総堀方向から西側の土塁方向にかけて行われており、遺構確認面も東から西にかけて深くなっている。現況図から判断すると、総堀に沿う土塁幅は、馬出付近から東端にかけて著しく狭くなっている。主郭北東部分で約17mあった土塁幅が、大手付近では8mとその規模を半減し、東端は幅3mとなっている。

館の廃絶後、水田に転換するため造成を行っているが、この際、総堀に沿う土塁を削平しているのかもしれない。検出した遺構もトレンチ西側は数多く、重複して検出され、その一方で、トレンチ東端では遺構も少なく散見する状態であった。



## 2. 遺構と遺物

### (1) 1号石塁 (図7・11・12・14)

馬出土塁に設定したトレンチ1～3で確認している。現況の石積から約1.5m内側に存在し、幅5.6m、高さ1m、5段程度の石積が残っている。北側は現況石積(3号石列)構築に際し、取り壊されている。すでに上部は削平されているが、土地区画として確認できる南北20mの範囲には、残存しているものと推定される。

土層堆積から構築以前、1号堀が存在していたことが分かる。堀を埋めた後、東西両側に石積を施し、石積背後は小礫を混入した土砂で搗き固め、内部は礫のみを充填している。部分的であるが、東側石積は長さ6mにわたり確認した。最も良く残る箇所では高さ1m、5段の石積が確認できる。西側石積は、大部分が取り壊されており、崩れかけた部分もみられた。部分的であるが、長さ3.6m、高さ0.5m、2段の石積を確認した。使用されている石材は、安山岩を主体とし、花崗岩も数石混じる。長径0.6m程度の自然石を用い、粗割石も僅かに確認できる。上下の石材との重ね積みを避け、表面より控えを長く取り、石尻を下げて積まれている。石積の勾配は、基底部から2段程度が85度前後、それ以上は77～78度であり、全体的に急勾配となる。

出土遺物は、かわらけ・捏鉢・内耳鍋・瀬戸美濃陶器・常滑甕・青磁・青白磁・石製品が出土する(図22、図23-1～12)。常滑甕の破片が多く、周辺一帯からも出土する。その他、石塁崩落土中からも多くの遺物が出土している(図23-16～22、図24-1～15)。

### (2) 1号堀 (図7・11-13・15)

トレンチ1・2で確認している。1号石塁構築以前に存在した堀であり、他の遺構が掘り込まれ規模などが不明瞭であるが、深さ2.65m、幅3.30mとなる。トレンチ5でも堀の落ち込みを一部確認した。

トレンチ1石塁基底部から、地山上に約0.4mの盛土整地層を確認したが、トレンチ2からはこの層を確認できなかった。石塁構築にともなう盛土整地と考えていたが、土層堆積からは不自然な結果となり、堀にともなう土塁などの痕跡と考えられる。

出土遺物は、かわらけ・常滑甕・青磁碗・白磁皿・染付碗などがある(図25-1～11)。石塁基底部の盛土整地から出土した遺物(図23-13～15)、その他、掘乱層から出土した遺物など(図25-12～22)もここに含めておく。

### (3) 石列

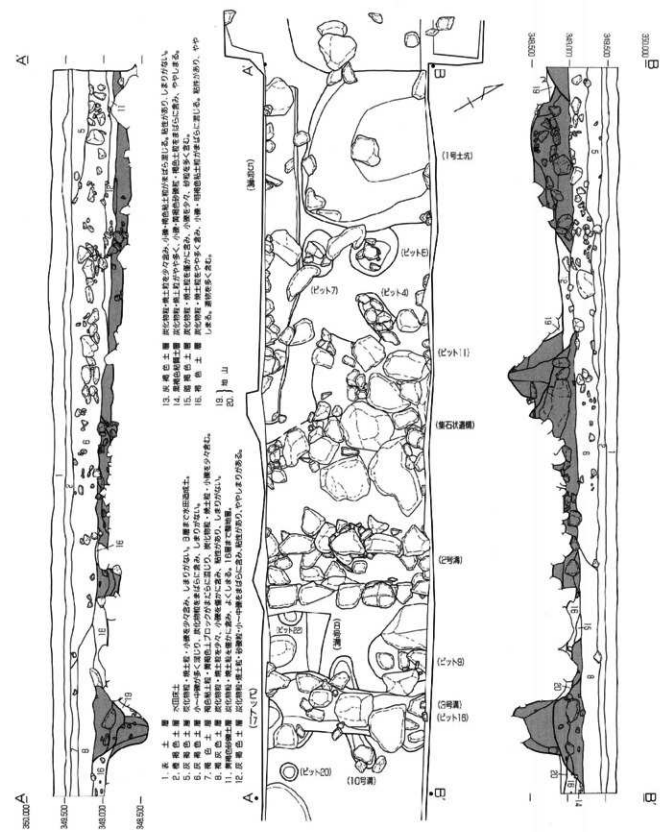
石積とする遺構も含まれ、また、今後の調査によっては石積となるものもあるが、調査時点での遺構名をそのまま使用した。

#### 1号石列 (図11)

トレンチ2で確認している。長さ3mにわたり、長径0.5m程度の礫を6石用い東西方向に並ぶ。石列背後は小礫が混じる土砂で固められ、前面には、石列と同規格の礫も散見し、約0.8mの範囲に多数の礫が集中する。土層状況はU字状の掘り込みに、砂粒が混入し、礫のみが堆積していた。側溝などの痕跡と考えられ、2号石列とともに建物区画を形成し、その前面に側溝が付設する。

出土遺物は、かわらけ・瀬戸美濃陶器・常滑甕である(図24-16～21)。石列を境に南北に分かれ、しかも、全て覆土出土であるため、石列にともなうものか明確でない。



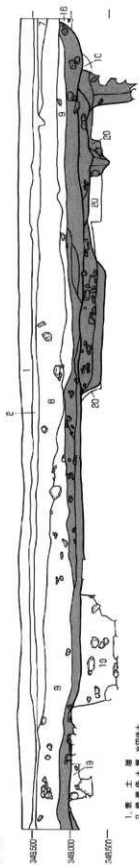


1. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまりがない。日曜まで灰土混成土。  
 2. 灰 赤土 層 小一室の多く埋じり。灰化層を多少含む。しまり少ない。  
 3. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 4. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 5. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 6. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 7. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 8. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 9. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 10. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 11. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 12. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。

13. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 14. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 15. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 16. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 17. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 18. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 19. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。  
 20. 灰 赤土 層 灰化層・赤土層・小溝を多少含む。しまり少ない。

図8 大手馬出土墓トレンチ1平面図・セクション(2)

A



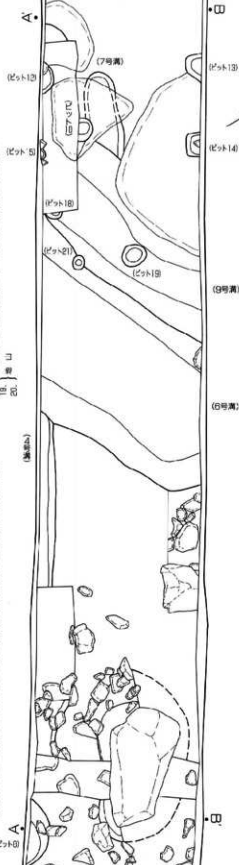
1. 黒土 層  
2. 褐色土 層  
3. 明褐色土 層  
4. 暗褐色土 層  
5. 黄褐色土 層  
6. 黄土 層  
7. 黄褐色土 層  
8. 黄褐色土 層  
9. 黄褐色土 層  
10. 黄褐色土 層  
11. 黄褐色土 層  
12. 黄褐色土 層

13. 明褐色土 層  
14. 暗褐色土 層  
15. 黄褐色土 層  
16. 黄褐色土 層  
17. 黄褐色土 層

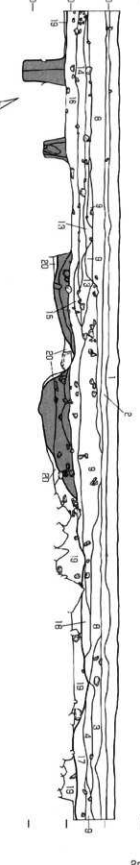
18. 黄褐色土 層  
19. 黄褐色土 層  
20. 黄褐色土 層

1. 黒土 層  
2. 褐色土 層  
3. 明褐色土 層  
4. 暗褐色土 層  
5. 黄褐色土 層  
6. 黄土 層  
7. 黄褐色土 層  
8. 黄褐色土 層  
9. 黄褐色土 層  
10. 黄褐色土 層  
11. 黄褐色土 層  
12. 黄褐色土 層  
13. 明褐色土 層  
14. 暗褐色土 層  
15. 黄褐色土 層  
16. 黄褐色土 層  
17. 黄褐色土 層  
18. 黄褐色土 層  
19. 黄褐色土 層  
20. 黄褐色土 層

A



B



B

図9 大手馬出土壘トレンチ1平面図・セクション(3)



## 2号石列 (図11)

長さ1.25m、1号石列と直交して南北方向に並ぶ。小振りの石を用い、一部に石積みられる。石列を境に土層が異なり、西側は落ち込みが確認できる。1号石列とともに1号堀が埋められた後、構築されている。

出土遺物は、石製品一点であるが(図24-22)、土層から判断すれば堀の堆積層出土である。

## 3号石列 (図12-14)

トレンチ3・4で確認した。馬出土墓の北側を画す石積である。高さ約1m、長さ5.95mを検出した。川原石を用い、落し積みとなっている。これを境に北側一帯は土層堆積が大きく異なり、砂礫土が厚く盛土され、径1mを越える巨石も混っている。3号石列構築によって1号石墓は破壊され、北側への続きは全く不明となる。

出土遺物は、砂礫土の盛土中から近代陶磁器とともに、かわらけ・内耳鍋・常滑甕が出土している(図24-23-25)。

## 4号石列 (図13)

トレンチ4北端で確認した。壁際に接し、周辺に多数の石が散在する中にある。遺構とすべきか不明瞭な部分もあるが、列をなし、石材の長軸を揃えて重ねられた部分も見られたため石列とした。南北方向にわたり、長さ2.97mを検出した。若干蛇行するが、一石のみ大きな石を用い、他は小振りの石を使っている。

遺物は、図25-25-27に図示した。かわらけ・常滑甕・石製品であるが、遺構ともなうか不明である。

## (4)集石状遺構 (図8・16)

トレンチ1で確認した。1号堀・2号溝が近接して存在する。長径1mに達する巨石や礫が、平滑な面を揃え、2m程の範囲に集中して存在する。土層では、2号溝の石積から1号堀の埋土面にかけて整地された状況が明らかであり、石材の平滑な面を揃え埋め込んでいることなど、盛土整地の痕跡と考えられる。

出土遺物は、かわらけ2点(図25-23.24)を図示した。

## (5)溝

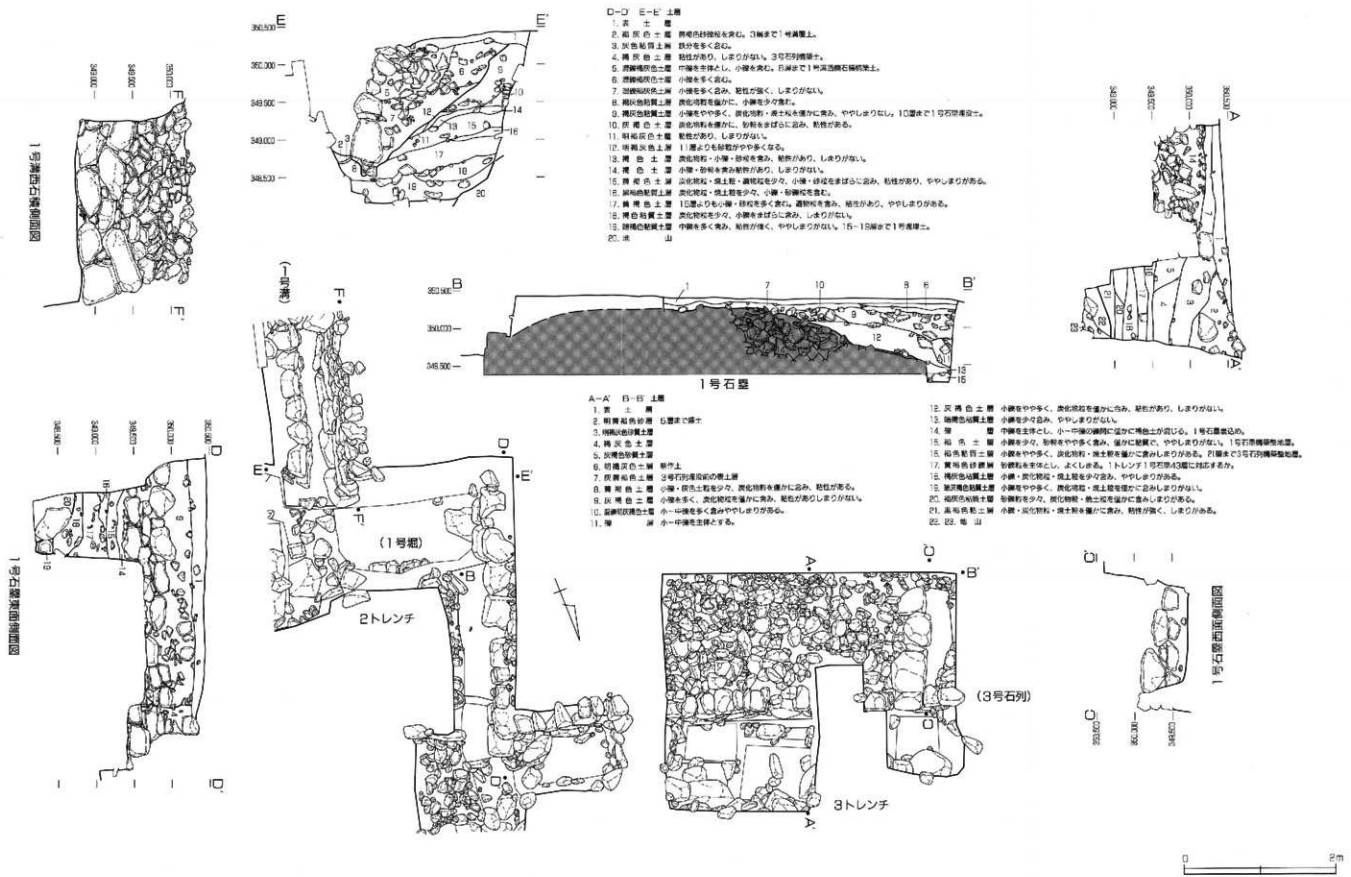
調査では10条の溝を確認した。今後の調査によっては見直しするものもあるが、調査時点での遺構名をそのまま使用した。

### 1号溝 (図7・11・12・14)

1号石墓東側前面に位置し、トレンチ1・2から検出している。幅0.25m、長さ約20mにわたる石積の溝で、南流する。上部に積み足しが確認でき、現状の馬出土墓東側を画す石積となっている。部分的に孕み、積み直しの痕跡も窺えるが、基底部より2段、高さ0.5~0.7mが当初の石積であろう。長径1mを越える巨石も使い、上石を直下の二石で支えるなど一定の技法が観察される。1号石墓との関係を把握するため、断ち割り調査を行ったが、各地点の土層堆積が全く異なり、複雑な様相を呈している。近年まで、水田水路として使用され続けたりしく、石積にコンクリートの擁壁を付け足し、さらには、埋没した後も塩ビ管を埋設して使用されていた。

出土遺物は、かわらけ・常滑甕がある(図26-14-18)。





- D-D' E-E' 土層
1. 灰土層 厚層状の礫石を含有。3層まで1号溝壁土。
  2. 灰褐色土層 礫石を多く含む。
  3. 灰黄色土層 礫石が散り、しまりがない。3号石列溝壁土。
  4. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  5. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  6. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  7. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  8. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  9. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  10. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  11. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  12. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  13. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  14. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  15. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  16. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  17. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  18. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  19. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  20. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  21. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。
  22. 黄褐色土層 礫石を多く含む。1号溝壁土。

- A-A' 白-白土層
1. 灰土層
  2. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  3. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  4. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  5. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  6. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  7. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  8. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  9. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  10. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  11. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  12. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  13. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  14. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  15. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  16. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  17. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  18. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  19. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  20. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  21. 黄褐色土層 礫石を多く含む。
  22. 黄褐色土層 礫石を多く含む。

図12 大手馬出土壘トレンチ2・3平面図・セクション





#### 2号溝 (図8・16)

トレンチ1で確認し、3号溝が近接する。幅0.4m、深さ0.3mを測り、南流する石組水路となる。土層堆積では、1号堀などを埋めた盛土整地層を掘り込んで構築されており、最終期の遺構と考えられる。東側には長径0.5m程の礫を用い、西側は小振りの礫を一部重ね積みしている。

出土遺物は、かわらけ・常滑甕・熨土がある (図26-19-24)。

#### 3号溝 (図8・17)

上幅1.0~1.4m、深さ約0.4mを測り、2号溝と近接する。並行して南流し、盛土整地層を掘り込み構築される。周辺から壁土の出土もあり、土塀などの存在を推定すれば、2号溝と一対で理解でき、土層堆積状況から同時存在が明確である。

出土遺物は、かわらけがある (図26-25)。

#### 4号溝 (図9・17)

トレンチ1の壁際から検出した。7・9号溝と重複し、確認した範囲で長さ13mにわたり、幅0.2m、深さ約0.2mを測る。東西方向の溝となるが、東西両端でその方向を変え、L字状に曲がるらしく、土層断面も僅かに両端が深くなっている。遺構覆土上に水田造成時の盛土が覆うため、最終期の遺構と考えられる。

#### 5号溝 (図8・17)

トレンチ1の壁際で確認した。2号溝と近接し、確認した範囲で長さ4.5m、幅0.45m、深さ約0.22mを測る。整地層を掘り込んでいるため、最終期の遺構と考えられるが、同時期の2・3号溝との関係など全体の様相は明確ではない。

出土遺物は、かわらけがある (図26-26-28)。

#### 6号溝 (図9・18)

トレンチ1から、4・9号溝と重複して確認した。幅約1.8m、深さ約0.3~0.4mを測り、軸線を違える溝となる。土層堆積から判断した新旧関係は、6号溝が古く、4号溝が最も新しい遺構となる。

出土遺物は、かわらけ (図26-29-31) を3点取りあげた。いずれもロクロ成形され、底部に糸切り痕を残すものとなろう。

#### 7号溝 (図9・18)

トレンチ1から9号溝と重複して確認した。幅約0.6m、深さ約0.13mを測り、4号溝と並行し、ともに最終期の遺構と考えられる。遺物が集中していたため溝としたが、全体の様相は明確ではない。

出土遺物は、かわらけ・片口鉢・染付がある (図27-1-8)。かわらけは、ロクロ成形され、底部に糸切り痕を残すもの、二次使用され被熱により瓦質化し、溶融物が付着するものがある。

#### 8号溝 (図8・17)

トレンチ1の壁際、3号溝と重複して確認する。確認した範囲で、幅約0.35m、深さ約0.05mを測り、4・5号溝と同軸となり、壁際から検出される。2・3号溝との関係など全体の様相は明確ではない。

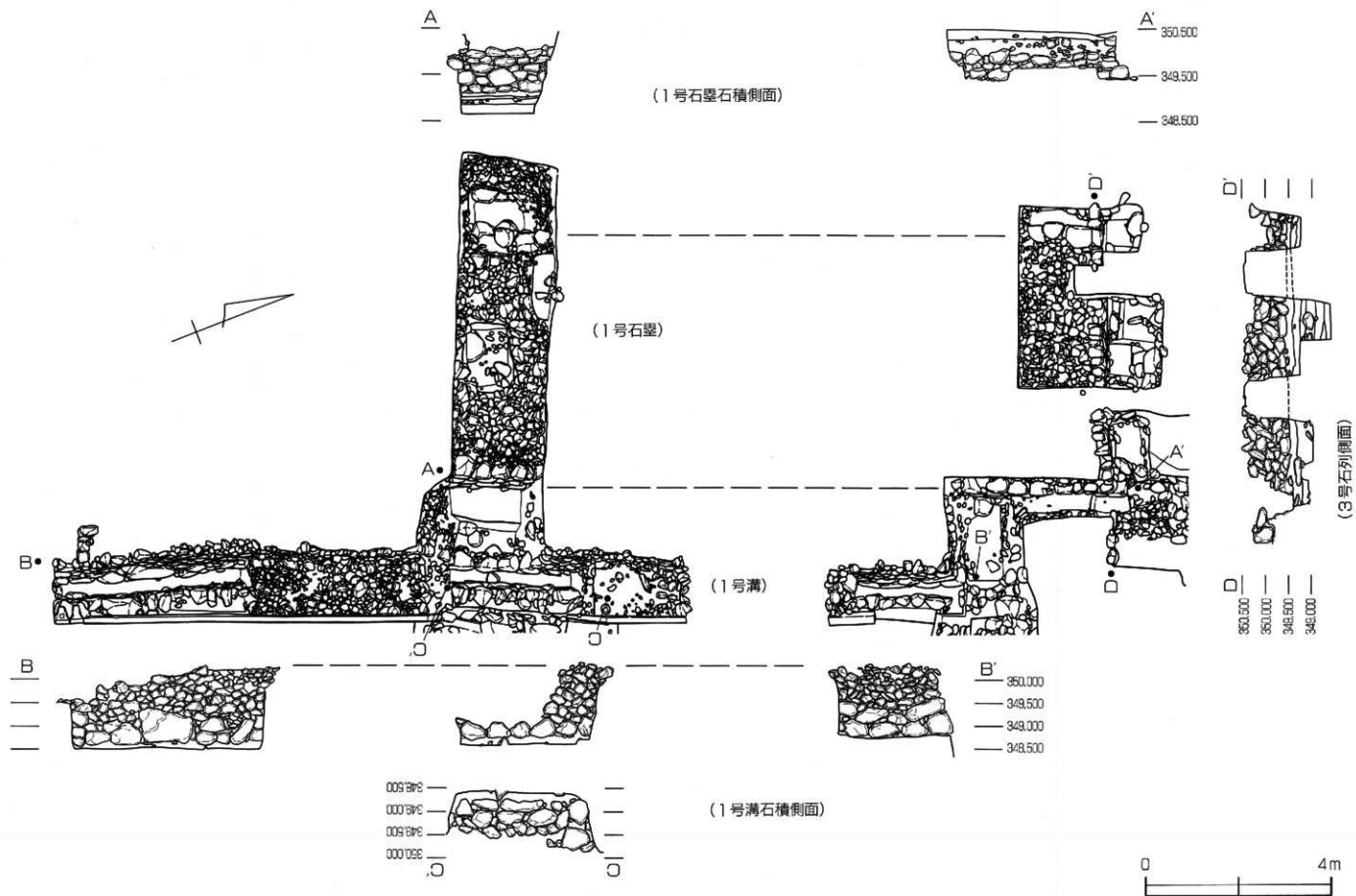


图 14 1号石壁·1号沟·3号石列石横侧面图

#### 9号溝 (図9・18)

トレンチ1から4・6・7号溝と重複し、幅約1.27m、深さ約0.26mを測る。土層状況から、埋没した6号溝を掘り直したものと考えられ、規模は縮小するものの並行して構築される。その後、4・7号溝が新たに造られている。

#### 10号溝 (図8・17)

トレンチ1に位置し、3号溝と重複して確認された。長さ1.53m、幅0.24~33m、深さ約0.07mを測る。僅かな確認のため全体の様相は不明確である。

#### (6)土坑

調査では3基の土坑を確認した。今後の調査によっては見直し、変更するものもあろうが、調査時点での遺構名をそのまま使用している。

#### 1号土坑 (図8・18)

トレンチ1に位置し、1号堀・集石状遺構が近接する。一部調査区外となるが、南北2.22m、東西2.10m、深さ0.55mを測る。底に焼土の堆積があり、大量の小礫とともに土器片が多数出土した。廃棄土坑などと考えられ、1号堀などを埋めた盛土整地層を掘り込んでおり、最終期の遺構と考えられる。

一括遺物と考えられ、多数のかわらけ片とともに・白磁皿がある (図26-1~13)。

#### 2号土坑 (図10・19)

トレンチ1の東端で、3号土坑と重複して検出した。一部調査区外となるが、南北約0.75m、東西0.98m、深さ0.12mを測る。遺構覆土上に水田造成時の盛土が覆っているため、最終期の遺構と考えられるが、出土遺物もなく詳細は不明である。

#### 3号土坑 (図10・19)

2号土坑と重複し、トレンチ1の東端から検出した。一部調査区外に広がるが、長軸約0.65m、短軸0.53m、深さ0.18mを測る。土層堆積から、2号土坑より古く位置づけられるが、同様に水田造成時の盛土が覆っており詳細は不明である。

#### (7)掘立柱建物 (図21)

トレンチ1から、3・9号溝と重複して検出した。調査区外に広がるため定かではないが、ビット12~17で構成され、南北1間、東西1間半の規模を有す。調査では、この周辺が最も重複が激しく複雑であったが、土層堆積から3・9号溝に先行すると考えられ、最も古い遺構となる。

ビット16から、かわらけ・青磁碗が出土する (図27-10~11)。

#### (8)ビット (図19・20)

調査では23基のビットを確認した。トレンチ2から1基確認した以外、他はトレンチ1から検出している。ビット12~17は掘立柱建物を構成するが、その他、列構成となるものも確認できなかった。掘り込みが極めて浅いもの、遺物がともなわないものなどもビットとして扱っている。

表3 ビット一覧表(大手馬出土墓)

( ) = 現存値 単位: cm

番号	平面形態	長軸	短軸	深さ	上層堆積	備考(出土遺物・重複関係等)
1	楕円形	78	63	19	焼土・炭化物を含む。礫が多数、混入する。	
2	略円形	46	42	20	焼土・炭化物を含む。	
3	円形	25	23	12	焼土・炭化物を含む。	
4	長楕円形	77	35	11	焼土・炭化物を含む。	ビット11と重複。
5	略円形	69	56	18	黄褐色土粒が混じる。上面に礎石様の平石あり。	
6	長楕円形	52	31	17	炭化物・黄褐色土粒が混じる。	
7	楕円形	62	39	17	炭化物・黄褐色土粒が混じる。	
8	楕円形?	80	(25)	13	炭化物が混じる。	
9	不整形?	(75)	(60)	12	焼土・炭化物を含む。整地層を掘り込む。	3号溝と重複。
10	略円形?	31	(19)	14		9号溝と重複。
11	楕円形?	(90)	(55)	75	柱痕跡あり。覆土直上に整地層が覆う。	ビット7・墓石状遺構と重複。
12	円形?	31	(11)	49	焼土・炭化物を含む。掘立柱建物柱穴となる。	4号溝と重複。
13	不整形?	30	(16)	44	焼土・炭化物を含む。掘立柱建物柱穴となる。	
14	方形?	24	(14)	24	焼土・炭化物を含む。柱痕跡あり。掘立柱建物柱穴となる。	
15	?	27	?	20	焼土・炭化物を含む。柱痕跡あり。掘立柱建物柱穴となる。	4・9号溝と重複。
16	不整形?	56	(21)	43	焼土・炭化物を含む。掘立柱建物柱穴となる。	3号溝と重複。
17	円形?	49	(15)	39	焼土・炭化物を含む。柱痕跡あり。掘立柱建物柱穴となる。	3号溝と重複。
18	略円形?	22	(9)	22	焼土・炭化物を含む。	7・9号溝と重複するか。
19	略円形	25	20	3	焼土・炭化物を含む。	
20	円形	23	22	24	焼土・炭化物を含む。柱痕跡(?)あり。	
21	円形	19	15	14		6・9号溝と重複。
22	略円形?	33	(19)	12		8号溝と重複。
23	不整形?	90	78	72	焼土・炭化物を含む。	

## (9)遺構外遺物(図27-12~40・図28・29)

整地・盛土層出土など遺構にともなわない遺物を取りあげる。多くの遺物が出土しているが、大部分はかわらけ片であり、陶磁器・石製品も僅かに見られた。

水田造成土(図27-12~15)・整地層(図27-16~19)から出土したものをあげた。整地層は最終期の遺構築造に際し行われ、水田造成は館麿絶後に実施され、両者には時間差が存在している。かわらけ・捏鉢・白磁皿・青磁碗・灰釉端反皿などが出土するが、遺物から時期差を判断するのは困難である。

図27-20~24は1号石墓基底層の直上より出土したものである。かわらけ・常滑甕が出土し、館麿絶直後の遺物と考えられる。

図27-25以下、各トレンチの一括出土遺物である。かわらけは全てロクロ成形され、底部に糸切り痕を残すものであり、二次的に使用され、ススの付着がみられるもの(図27-25・37・図28-18)、溶融物が付着し被熱で瓦質化しているもの(図27-31)がある。他に、捏鉢・白磁端反皿・青磁碗・染付皿・瀬戸美濃天目・灰釉丸碗・丸皿・常滑甕などがある。石製品は全て、表採遺物であった。

### 第3節 小 括

調査では多くの遺構・遺物が確認された。検出した遺構は重複関係あるいは盛土整地状況から何時期かの変遷が捉えられている。最も重複が激しかった掘立柱建物跡周辺では、掘立柱建物→9号溝→整地・3号溝構築となり、盛土整地後に構築された遺構が、最終期と位置づけられる。これまで主郭部及び周辺曲輪の調査により、館跡の6時期の変遷が把握されているが、この地点では3段階程度の変遷が想定できる。個々の遺構ごとに観察すれば9号溝に先行する7号溝も存在し、複雑な様相となる。館の変遷と個々の遺構変遷との整合作業が急務となる。

最終期の遺構は盛土整地を実施して構築されているが、整地層は石塁基底部から東側へ約23mにわたり広範囲に認められた。調査では、重複して検出されていた遺構が、トレンチ東側で極端に少なく散見する状態となる。土層堆積では、こうした遺構空白地に盛土整地が及んでおらず、すりあわせている状況であった。今後、大手という空間の中で、土塁など築造物の存在も推定しながら検討していかなければならない。

非常に大まかであるが、この地点は盛土整地前後の段階で様相が一変する。最終期、幅約10mの規模を有し、馬出空間を画していた堀と土塁は、削平を受けて埋め戻された。土塁基底層を利用して構築された石積は、1mほど残存していたが、高さ2m程度の低石垣であり、馬出土塁は礫石のみによる構築物へと変化している。前面には通路と推定できる約2mの空間を隔て1号溝が並行する。その他、2～5、7号溝が同時期と考えられるが、いずれも石塁に平行もしくは直交し、計画的な設計配置が推定される。

石塁に上部構築物が存在したか不明であるが、石塁基底部の幅約5.6m、構築角度を78度、高さ1.8m（＝1間）と推定すれば、天端幅は約4.8m（＝2間4尺）となる。両側に2尺づつ控えをとり、幅2間の建物が上部構築物として復元できる。調査で石塁際に排水側溝が確認されなかったことから、雨水処理に際し、石塁幅に庇が納まる設計と推定される。石塁内部に礫石のみが充填されているのは、雨水が石塁内部へ浸透するように構築したためと考えられる。調査期間中にいただいた多くの方々のご指摘・ご教示から推定復元を試みたが、今後の検討課題となろう。

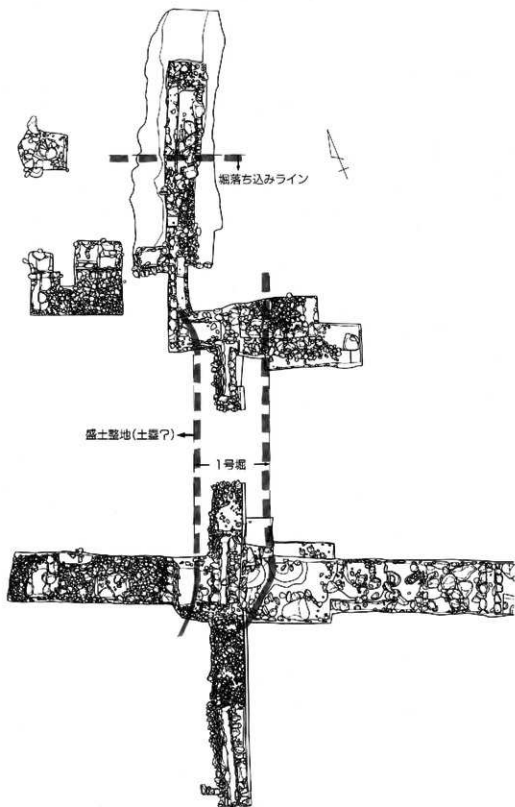
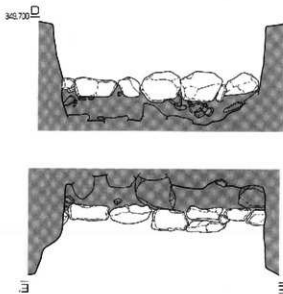
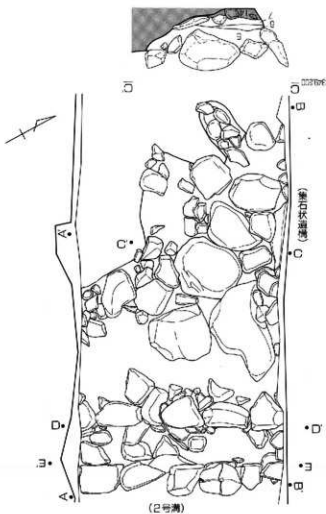


図15 1号堀推定範囲





- ニワカク石・白土・白土土層
1. 褐色土層 灰化腐植土・腐植土・腐植土層の上部にあり、ややしまりがある。
  2. 褐色腐植土層 灰化腐植土・腐植土・腐植土層の下部にあり、ややしまりがある。
  3. 褐色腐植土層 灰化腐植土・腐植土・腐植土層の下部にあり、ややしまりがある。
  4. 褐色腐植土層 灰化腐植土・腐植土・腐植土層の下部にあり、ややしまりがある。
  5. 褐色腐植土層 灰化腐植土・腐植土・腐植土層の下部にあり、ややしまりがある。
  6. 褐色腐植土層 灰化腐植土・腐植土・腐植土層の下部にあり、ややしまりがある。
  7. 褐色腐植土層 灰化腐植土・腐植土・腐植土層の下部にあり、ややしまりがある。
  8. 褐色腐植土層 灰化腐植土・腐植土・腐植土層の下部にあり、ややしまりがある。
  9. 褐色腐植土層 灰化腐植土・腐植土・腐植土層の下部にあり、ややしまりがある。
  10. 褐色腐植土層 灰化腐植土・腐植土・腐植土層の下部にあり、ややしまりがある。
  11. 褐色腐植土層 灰化腐植土・腐植土・腐植土層の下部にあり、ややしまりがある。
  12. 褐色腐植土層 灰化腐植土・腐植土・腐植土層の下部にあり、ややしまりがある。
  13. 褐色腐植土層 灰化腐植土・腐植土・腐植土層の下部にあり、ややしまりがある。

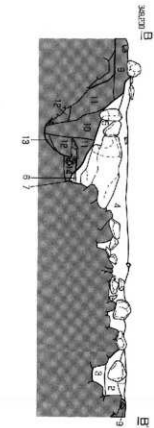
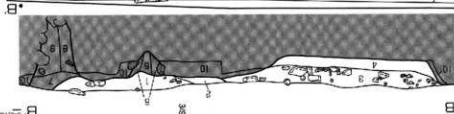
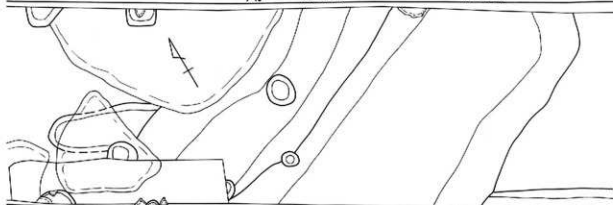
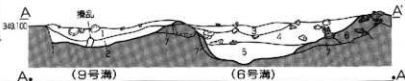


図16 集石状遺構・2号溝平面図・セクション





1. 褐色土層 泥化地盤・焼土坑・焼土塊等の中多く見出し、小礫が混在。掘削時のやじりまじりが見出し。
2. 褐色土層 少量・砂礫層の中多く、砂の混在も層中に混在。
3. 褐色土層 泥化地盤・焼土坑・焼土塊の中多く見出し、掘削時のやじりまじり、やじりまじり。
4. 褐色土層 小・中礫を主体とし、掘削時のやじりまじり、やじりまじり。
5. 褐色土層 掘削時のやじりまじり、掘削時のやじりまじり、よく見出し。
6. 7. 山



1. 褐色土層 泥化地盤・焼土坑・焼土塊の中多く見出し、小礫・角礫の混在が少なく見出し。
2. 褐色土層 泥化地盤・焼土坑・焼土塊の中多く見出し、小礫・角礫の混在が少なく見出し。
3. 褐色土層 泥化地盤・焼土坑・焼土塊の中多く見出し、小礫・角礫の混在が少なく見出し。
4. 褐色土層 泥化地盤・焼土坑・焼土塊の中多く見出し、小礫・角礫の混在が少なく見出し。
5. 褐色土層 泥化地盤・焼土坑・焼土塊の中多く見出し、小礫・角礫の混在が少なく見出し。
6. 褐色土層 泥化地盤・焼土坑・焼土塊の中多く見出し、小礫・角礫の混在が少なく見出し。
7. 褐色土層 泥化地盤・焼土坑・焼土塊の中多く見出し、小礫・角礫の混在が少なく見出し。
8. 褐色土層 泥化地盤・焼土坑・焼土塊の中多く見出し、小礫・角礫の混在が少なく見出し。
9. 褐色土層 泥化地盤・焼土坑・焼土塊の中多く見出し、小礫・角礫の混在が少なく見出し。
10. 山



1. 褐色土層 小礫・角礫の混在が少なく見出し。
2. 褐色土層 小礫・角礫の混在が少なく見出し。
3. 褐色土層 小礫・角礫の混在が少なく見出し。

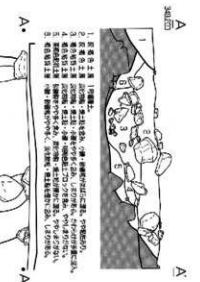
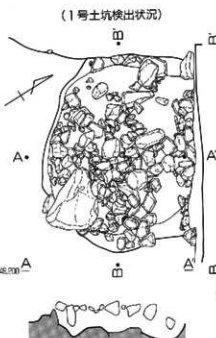
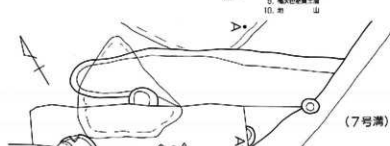
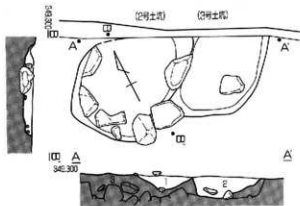


図 18 6・7・9号溝、1号土坑平面図・セクション



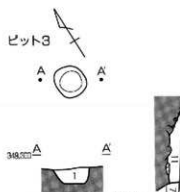
1. 褐色粘質土層 炭化植物・炭土粒・小塚を少量含む。よくしめる。
2. 褐色粘質土層 炭土粒を豊富に、小塚・炭化植物・フコクを多く含む。よくしめる。
3. 土層



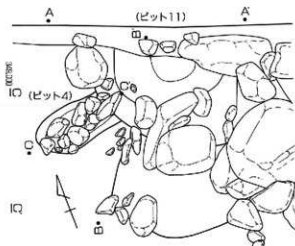
1. 褐色粘質土層 炭化植物・粘土粒を豊富に含む。しめるが片断。



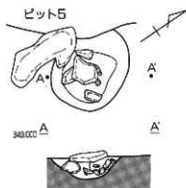
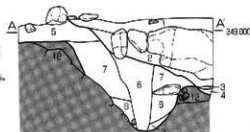
1. 褐色粘質土層 炭化植物・炭土粒を少量含む。しめるが片断。



1. 褐色粘質土層 炭化植物・炭土粒・小塚を少量含む。しめるが片断。



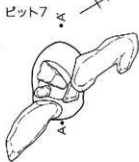
1. 褐色土層 山麓まで褐色粘質土層が。
2. 褐色粘質土層
3. 褐色粘質土層
4. 褐色粘質土層
5. 褐色粘質土層
6. 褐色粘質土層
7. 褐色粘質土層 少量・炭化植物・炭土粒を少量含む。よくしめる。
8. 褐色粘質土層 炭化植物・炭土粒・小塚・炭化植物・フコクを豊富に含む。よくしめる。
9. 褐色粘質土層 炭化植物・炭土粒を豊富に含む。よくしめる。
10. 褐色粘質土層 炭化植物・炭土粒を豊富に含む。よくしめる。
11. 褐色粘質土層 炭化植物・炭土粒を豊富に含む。しめるが片断。
12. 土層



1. 褐色粘質土層 炭化植物・炭土粒を豊富に含む。よくしめる。



1. 褐色粘質土層 炭化植物・炭土粒・炭化植物・フコクを豊富に含む。よくしめる。
2. 褐色粘質土層 炭化植物・炭土粒を豊富に含む。よくしめる。

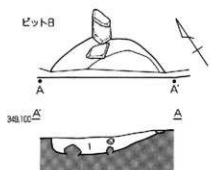


345300

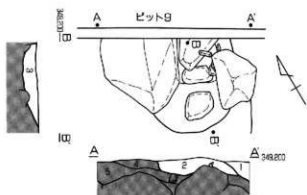


この図は、本誌に掲載された資料に基づき、筆者が作成したものである。資料の正確性を保証するものではない。また、この図は、本誌に掲載された資料に基づき、筆者が作成したものである。資料の正確性を保証するものではない。

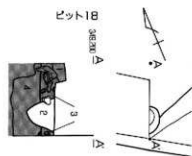
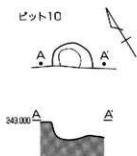
図19 2・3号土坑、ピット1-7・11平面図・セクション



1. 褐色粘質土層 小溝をやや多く、炭化植物・硬褐色粘土ブロックを盛りに多く、粘性が強く、ややしめる。



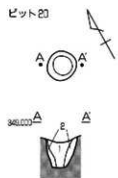
1. 黒褐色土層 5可燻土。  
2. 灰褐色土層 炭化植物・粘土板・小溝を盛りに多く、粘性が強く、ややしめるが若干。  
3. 粘褐色粘質土層 炭化植物・粘土板を盛りに多く、粘性が強く、ややしめるが若干。  
4. 灰褐色粘質土層 5可燻土。  
5. 褐色土層



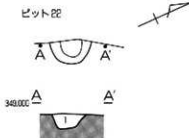
1. 黒褐色粘質土層 7可燻土。  
2. 褐色粘質土層 炭化植物・粘土板・小溝を少々盛りに多く、粘性が強く、ややしめるが若干。  
3. 褐色粘質土層 5可燻土。  
4. 地



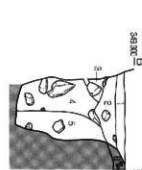
1. 褐色粘質土層 炭化植物・粘土板を盛りに多く、粘性が強く、ややしめるが若干。



1. 粘褐色粘質土層 炭化植物・粘土板を盛りに多く、粘性が強く、ややしめる。  
2. 褐色粘質土層 炭化植物・粘褐色土を盛りに多く、粘性が強く、ややしめる。



1. 褐色粘質土層 小溝を少々盛りに多く、粘性が強くしめるが若干。



1. 粘褐色粘質土層 砂礫・粘褐色粘土ブロックを多く盛りに多く、粘性が強く、ややしめる。  
2. 粘褐色粘質土層 炭化植物・粘土板・小溝を盛りに多く、粘性が強く、ややしめるが若干。  
3. 粘褐色粘質土層 小溝をやや多く盛りに多く、粘性が強く、ややしめるが若干。  
4. 粘褐色粘質土層 砂礫・粘褐色粘土ブロックを多く盛りに多く、粘性が強く、ややしめるが若干。  
5. 褐色粘質土層 砂礫・粘褐色粘土ブロックを多く盛りに多く、粘性が強く、ややしめるが若干。  
6. 粘褐色粘質土層 粘褐色。  
7. 地

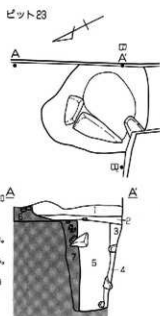
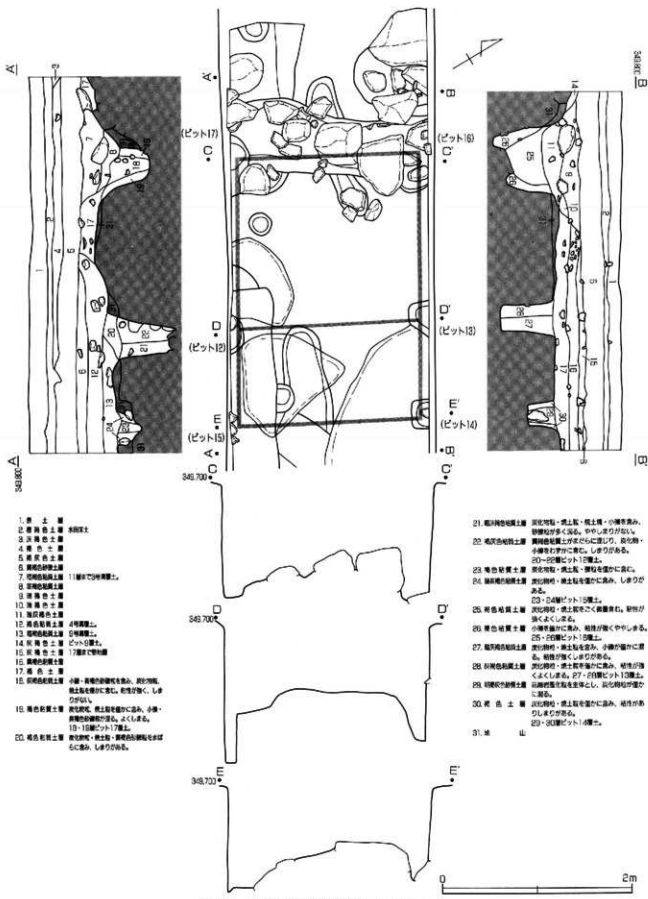


図 20 ピット8～10、18～23平面図・セクション・エレベーション



- 1. 赤土層
- 2. 黒褐色粘土層 腐植土
- 3. 赤褐色土層
- 4. 褐色土層
- 5. 黒褐色土層
- 6. 黒褐色土層
- 7. 腐植粘土層 1層まで粘質土。
- 8. 黒褐色粘土層
- 9. 黒褐色土層
- 10. 黒褐色土層
- 11. 腐植粘土層
- 12. 褐色粘土層 粘質黄土。
- 13. 腐植粘土層 粘質黄土。
- 14. 赤褐色土層 ピット18壁土。
- 15. 黒褐色土層 1層まで粘質土。
- 16. 腐植粘土層
- 17. 褐色土層
- 18. 腐植粘土層 小溝・溝壁の腐植土を積み、腐植粘土、粘土を壁面に塗り、粘りが強く、しぼりやすい。
- 19. 褐色粘土層 泥状泥、粘土粒を壁面に塗り、小溝・溝壁の腐植土を積み、よくしぼる。
- 20. 褐色粘土層 泥状泥・粘土粒・腐植粘土粒を壁面に塗り、しぼりやすい。

- 21. 腐植粘土層 泥状泥・粘土粒・腐土層・小溝を積み、腐植土が多く混入、中やしぼりが多い。
- 22. 腐植粘土層 腐植粘土層が中に入り、粘土層・小溝を壁面に塗り、しぼりやすい。
- 23. 褐色粘土層 泥状泥・粘土粒・壁面に高く。
- 24. 腐植粘土層 泥状泥・粘土粒を壁面に高く、しぼりやすい。
- 25. 褐色粘土層 泥状泥・粘土粒を壁面に高く、しぼりやすい。
- 26. 褐色粘土層 小溝を壁面に塗り、粘りが強くやしぼる。
- 27. 腐植粘土層 泥状泥・粘土粒を壁面に塗り、粘りが強くやしぼりやすい。
- 28. 腐植粘土層 泥状泥・粘土粒を壁面に塗り、粘りが強くやしぼりやすい。
- 29. 腐植粘土層 泥状泥・粘土粒を壁面に塗り、粘りが強くやしぼりやすい。
- 30. 褐色土層 泥状泥・粘土粒を壁面に塗り、粘りが強くやしぼりやすい。
- 31. 溝

図21 掘立柱建物平面図・セクション

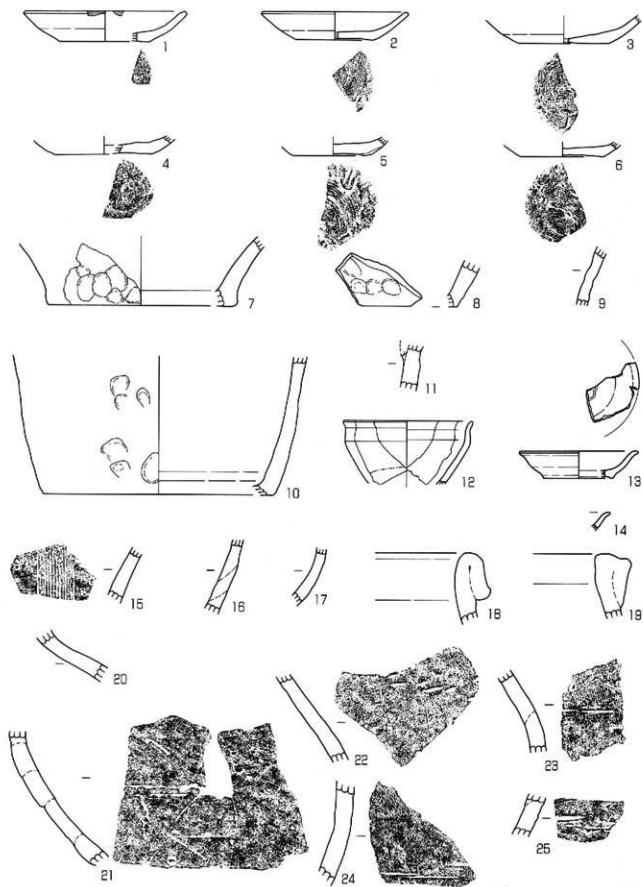


图22 大手出土遺物(1)

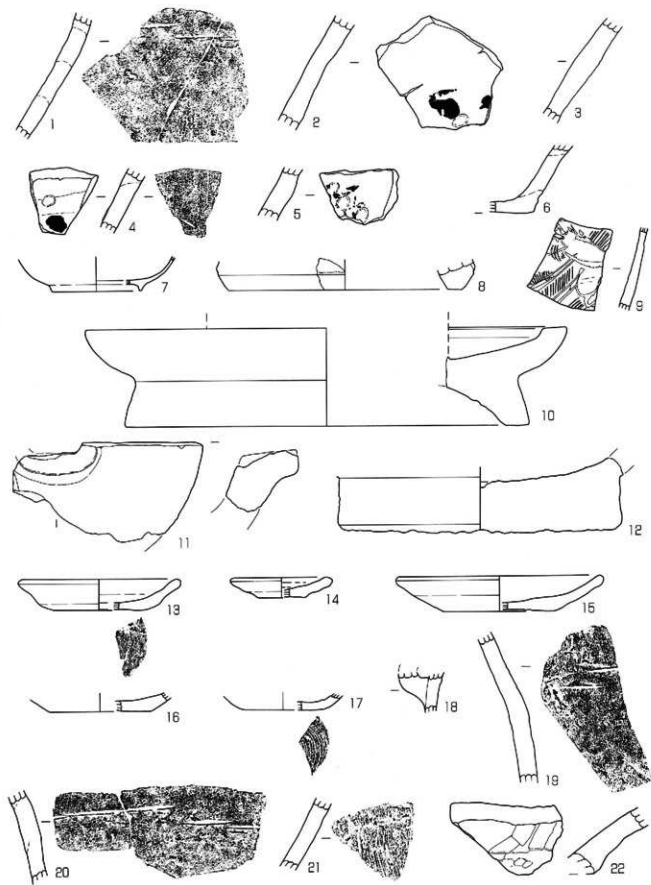


图23 大手出土遺物(2)

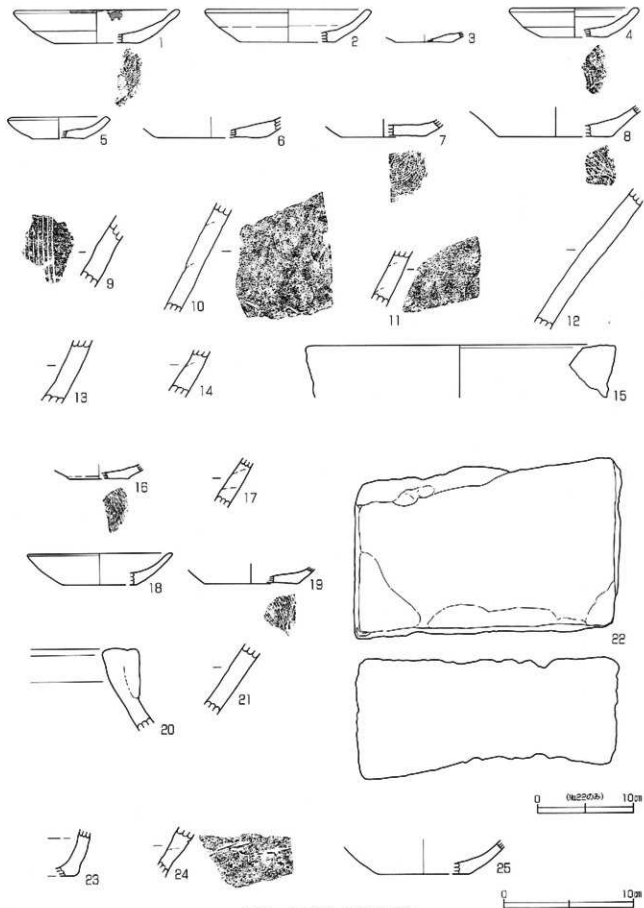


图24 大手出土遺物(3)



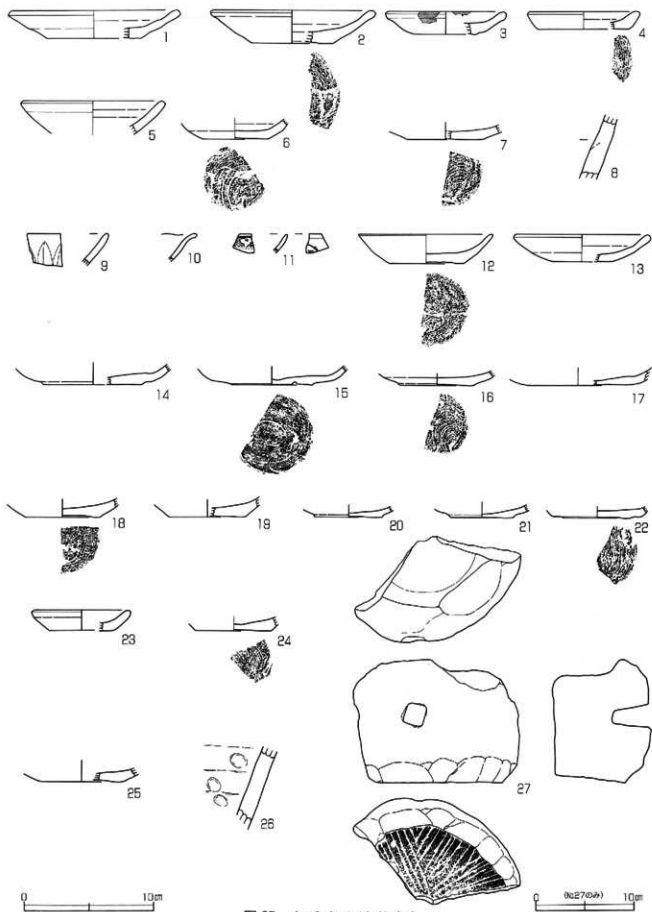


図25 大手出土遺物(4)

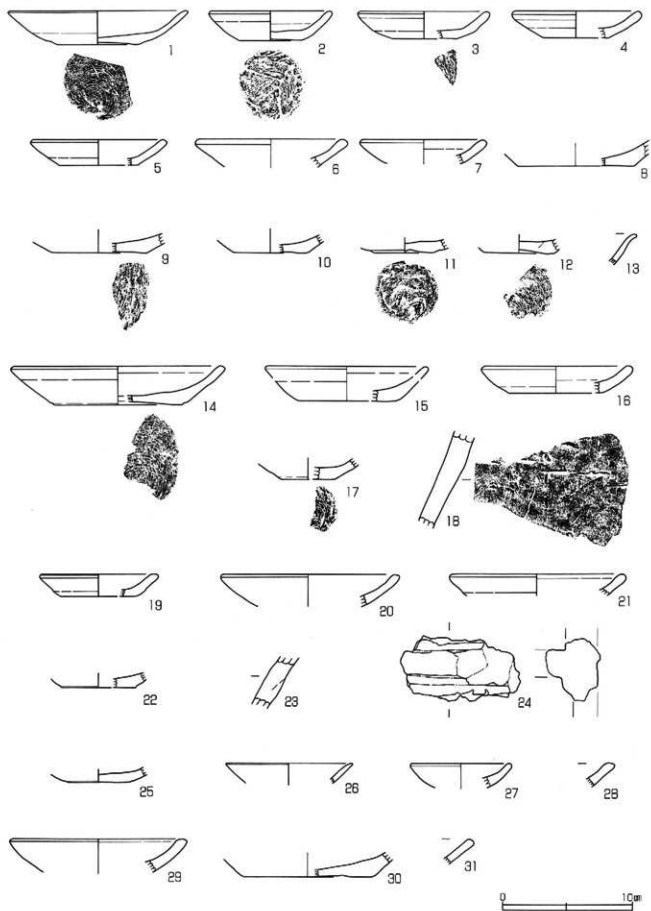


图 26 大手出土遺物 (5)

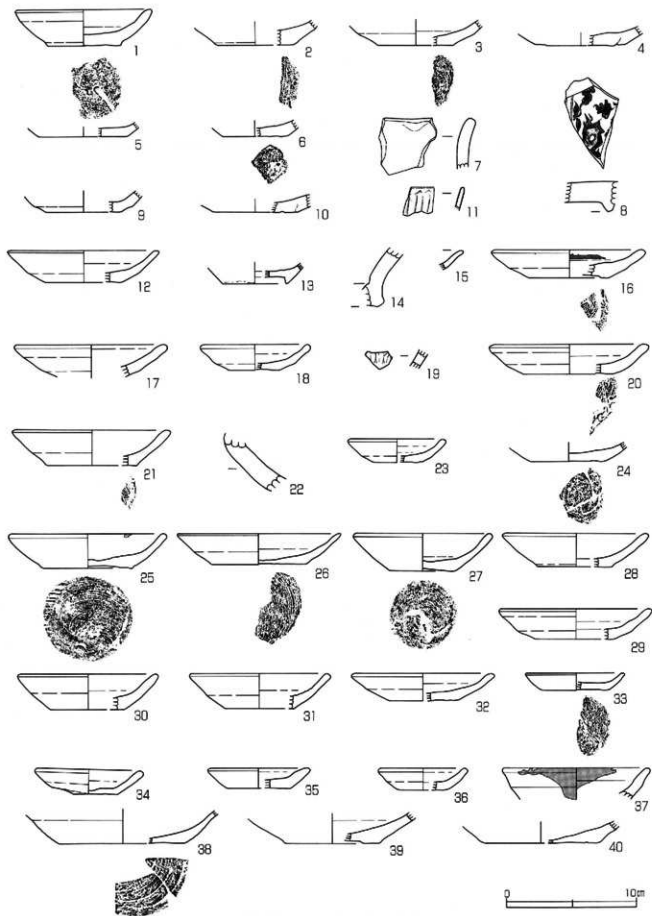


图 27 大手出土遺物(6)

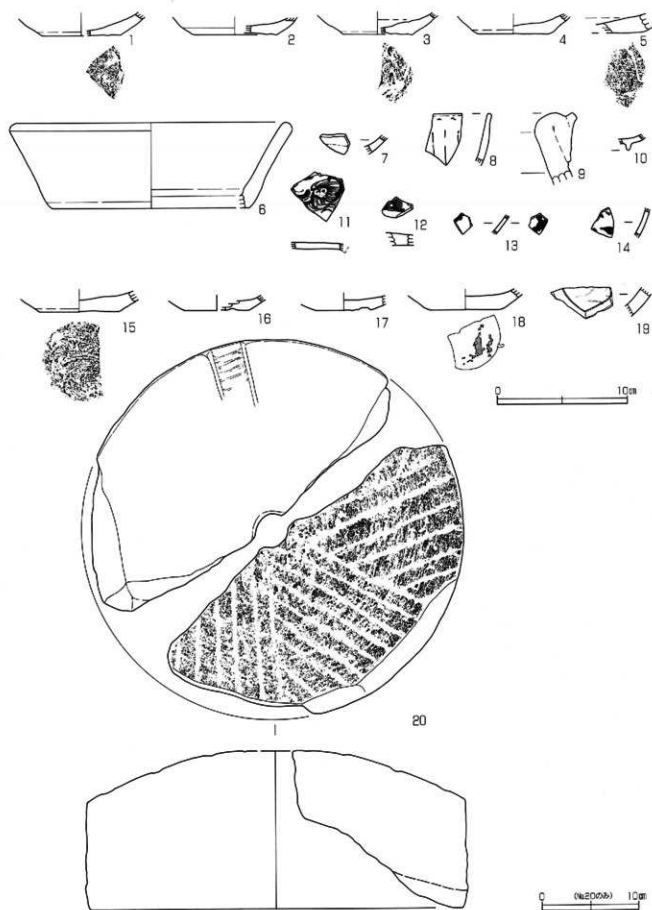


図28 大手出土遺物(7)

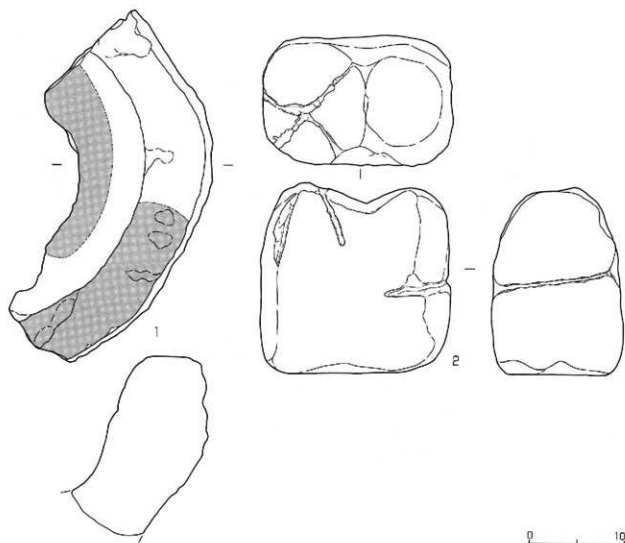


图 29 大手出土遺物(8)

表4 大手馬出土土器出土遺物観察表

( ) 復元線

図録号	出土状況	種別・器種	法量 (cm)			部位	観察所見 (調整・文様・その他)	胎土	色調	備考(時代等)
			口径	底径	器高					
22	1号石皿	土器 かからけ	(12.0)	(7.0)	(2.5)	口縁 -底面	ロクロ成形、底部回転系切り、 口縁部タール付着	やや密	鈍い褐色	
#	2号石皿	土器 かからけ	(11.2)	(6.0)	(2.2)	口縁 -底面	ロクロ成形、底部回転系切り	やや密	鈍い褐色	
#	3号石皿	土器 かからけ		(7.0)		体部 -底面	ロクロ成形、底部回転系切り	やや密	鈍い黄褐色	
#	4号石皿	土器 かからけ		(5.6)		底面	ロクロ成形、底部回転系切り	やや密	鈍い黄褐色	
#	5号石皿	土器 かからけ		6.3		底面	ロクロ成形、底部回転系切り後 粘土貼り付け	やや粗	鈍い黄褐色	
#	6号石皿	土器 かからけ		(6.4)		底面	ロクロ成形、底部回転系切り	やや粗	鈍い褐色	
#	7号石皿	土器 押鉢		(14.6)		底面	外面指頭痕	密	浅黄褐色	
#	8号石皿	土器 押鉢				底面	外面指頭痕	やや密	褐色	
#	9号石皿	土器 押鉢				体部		やや粗	鈍い褐色	
#	10号石皿	土器 土鍋		(18.0)		体部 -底面	外面指頭痕	やや粗	外面/褐色 外面/鈍い褐色	
#	11号石皿	土器 内耳瓶				体部		やや密	褐色	
#	12号石皿	瀬戸美濃 大日茶碗 (10.0)				口縁 -体部	体部下半焼結	密	胎土/浅黄褐色 胎土/黄褐色	大塚2
#	13号石皿	瀬戸美濃 灰釉薬注皿	(9.4)	(5.4)	(2.1)	口縁 -底面	付高台、夏込部印花文、輪下牙痕	密	胎土/鈍い黄褐色 胎土/浅黄褐色	大塚2
#	14号石皿	瀬戸美濃 灰釉薬注皿				口縁部		密	胎土/浅黄褐色 胎土/浅黄褐色	
#	15号石皿	瀬戸美濃 押鉢				体部	錆蝕	やや粗	胎土/灰白色 胎土/灰褐色	
#	16号石皿	瀬戸美濃				体部		密	胎土/鈍い灰褐色 胎土/黒褐色	
#	17号石皿	瀬戸美濃				体部		密	胎土/浅黄褐色 胎土/鈍い黄褐色	
#	18号石皿	常滑 甕				口縁部		やや密	胎土/灰黄褐色 胎土/灰褐色	
#	19号石皿	常滑 甕				口縁部		密	胎土/灰白色 胎土/赤褐色	1500~1550年
#	20号石皿	常滑 甕				胴部		密	胎土/灰黄褐色 胎土/鈍い赤褐色	
#	21号石皿	常滑 甕				胴部		やや粗	胎土/鈍い褐色 外面/灰褐色	
#	22号石皿	常滑 甕				胴部		密	胎土/灰黄褐色 胎土/鈍い赤褐色	
#	23号石皿	常滑 甕				胴部		やや密	胎土/灰黄褐色 胎土/灰赤色	
#	24号石皿	常滑 甕				胴部		やや密	鈍い赤褐色	
#	25号石皿	常滑 甕				胴部		やや密	鈍い赤褐色	
23	1号石皿	常滑 甕				胴部		やや粗	内面/灰赤色 外面/灰黄褐色	
#	2号石皿	常滑 甕				胴部	内面塗付着、指頭痕	やや密	鈍い褐色	
#	3号石皿	常滑 甕				胴部		やや粗	内面/灰褐色 外面/褐色	
#	4号石皿	常滑 甕				胴部	内面塗付着、指頭痕	やや密	内面/鈍い褐色 外面/灰黄褐色	
#	5号石皿	常滑 甕				胴部	内面塗付着、指頭痕	やや密	鈍い赤褐色	
#	6号石皿	常滑 甕				底面		密	鈍い褐色	
#	7号石皿	青磁 折縁皿(?)		(7.0)		体部 -底面	高台登付無脚、被熱	緻密	胎土/灰白色 胎土/明緑灰色	13c後半~14c前半
#	8号石皿	青磁 酒会壺		(18.2)		底面		緻密	胎土/灰白色 胎土/オリーブ灰色	
#	9号石皿	青白磁 梅瓶				体部		緻密	胎土/灰白色 胎土/明黄灰色	
#	10号石皿	石製品 茶臼	(37.4)	(31.6)	(7.7)	下臼				
#	11号石皿	石製品 押鉢(?)								
#	12号石皿	石製品 ヒヤ鉢(?)		(21.2)						
#	13号石皿 下腹42解	土器 かからけ	(12.0)	(6.8)	(2.5)	口縁 -底面	ロクロ成形、底部回転系切り	やや粗	褐色	
#	14号石皿 下腹42解	土器 かからけ	(9.2)	(3.6)	(1.6)	口縁 -底面	ロクロ成形、底部回転系切り	やや密	褐色	

国番号	出土位置	種別・器種	法 量 (cm)			部位	観察所見 (調整・文様・その他)	胎土	色調	備考(時代等)
			口径	底径	器高					
23	1号石原 下層42層	土器 かわらけ	(15.8)	(8.8)	(2.8)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	橙色	
16	1号石原 西側	土器 かわらけ		(7.8)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	橙色	
17	1号石原 西側	土器 かわらけ		(6.4)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐灰色	
18	1号石原 西側	土器 内耳鍋				体部		やや粗	橙色	
19	1号石原 西側	常滑 甕				胴部		密	胎土/橙黄色 釉/黄褐色	
20	1号石原 西側	常滑 甕				胴部		密	胎土/橙黄色 釉/オリーブ褐色	
21	1号石原 内側	常滑 甕				胴部		やや粗	橙黄色	
22	1号石原 内側	常滑 甕				底部	外面ケズリ	やや粗	橙黄色	
24	1号石原 東側	土器 かわらけ	(12.4)	(6.4)	(2.6)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り、 口縁部ケール付着	密	鈍い橙黄色	
2	1号石原 東側	土器 かわらけ	(12.4)	(7.4)	(2.6)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	橙黄色	
3	1号石原 東側	土器 かわらけ		(4.4)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	緻密	浅黄橙黄色	
4	1号石原 東側下層	土器 かわらけ	(9.4)	(5.4)	(2.3)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	橙黄色	
5	1号石原 東側下層	土器 かわらけ	(7.2)	(4.0)	(1.7)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	橙黄色	
6	1号石原 東側下層	土器 かわらけ		(8.0)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	橙黄色	
7	1号石原 東側下層	土器 かわらけ		(6.4)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	鈍い黄橙黄色	
8	1号石原 東側下層	土器 鉢		(9.0)		底部		やや密	橙黄色	
9	1号石原 東側下層	土器 播鉢				体部		粗	鈍い橙黄色	
10	1号石原 東側	常滑 甕				胴部		やや密	胎土/橙黄色 釉/灰黄褐色	
11	1号石原 東側	常滑 甕				胴部		やや密	胎土/鈍い赤褐色 釉/暗灰黄色	
12	1号石原 東側	常滑 甕				胴部		やや密	胎土/灰黄褐色 釉/灰褐色	
13	1号石原 東側	常滑 甕				胴部		密	胎土/灰黄褐色 釉/灰褐色	
14	1号石原 東側	常滑 甕				胴部		密	胎土/鈍い褐色 釉/灰褐色	
15	1号石原 東側	石製品								
16	1号石列北	土器 かわらけ		(4.6)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	橙黄色	
17	1号石列北	瀬戸美濃				体部		密	褐灰色	
18	1号石列南	土器 かわらけ	(11.0)	(5.8)	(2.5)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	鈍い橙黄色	
19	1号石列南	土器 かわらけ		(7.2)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	鈍い橙黄色	
20	1号石列南	常滑 甕				口縁部		密	胎土/褐灰色 釉/灰褐色	1500-1550年
21	1号石列南	常滑 甕				胴部		密	胎土/灰白色 釉/灰褐色	
22	2号石列西	石製品 五輪塔(?)								
23	3号石列 北側	土器 内耳鍋				底部	ロクロ成形	やや密	鈍い橙黄色	
24	3号石列 北側	常滑 甕				胴部		密	胎土/褐灰色 釉/鈍い赤褐色	
25	3号石列 北側下層	土器 かわらけ				体部 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	橙黄色	
25	1号堀	土器 かわらけ	(12.8)	(7.2)	(2.2)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	内面/橙黄色 外面/褐灰色	
2	1号堀	土器 かわらけ	(12.2)	(6.4)	(2.6)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	橙黄色	
3	1号堀	土器 かわらけ	(9.0)	(5.8)	(1.8)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り、 口縁部に灰化物付着	やや密	橙黄色	

図番号	出土位置	類別・器種	法量 (cm)			部位	観察所見 (調整・文様・その他)	胎土	色調	備考(時代等)
			口径	底径	器高					
25	4号塚	土器 かわらけ	(8.4)	(7.0)	(1.4)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い赤褐色	
5	1号塚	土器 かわらけ	(10.8)			口縁 -体部	ロクロ成形	やや密	褐色	
6	1号塚	土器 かわらけ		(5.4)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い赤褐色	
7	1号塚	土器 かわらけ		(6.0)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い褐色	
8	1号塚	常滑 甕				胴部		密	胎上/褐灰色 胎/灰褐色	
9	1号塚	青磁 碗				口縁部	片切形鋸邊弁文、被熱	緻密	胎上/灰白色 胎/明オリブ灰色	13c後半~14c前半
10	1号塚	白磁 甕形(?)				口縁部		緻密	灰白色	15c後半?
11	1号塚	染付 碗				口縁部	内面四方様文、外面草花文、饅頭心	緻密	灰白色	16c中頃~後半
12	1号塚 図7-22解	土器 かわらけ	(10.4)	(6.0)	(2.3)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	褐色	
13	1号塚 図7-22解	土器 かわらけ	(10.2)	(4.5)	(2.2)	口縁 -底部	ロクロ成形	やや密	鈍い褐色	
14	1号塚攪乱	土器 かわらけ		(7.8)		底部	ロクロ成形	やや密	浅黄褐色	
15	1号塚攪乱	土器 かわらけ		(6.4)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
16	1号塚攪乱	土器 かわらけ		(5.8)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い褐色	
17	1号塚攪乱	土器 かわらけ		(7.8)		底部	ロクロ成形	やや密	褐色	
18	1号塚攪乱	土器 かわらけ		(5.8)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い褐色	
19	1号塚攪乱	土器 かわらけ		(6.0)		底部	ロクロ成形	やや密	鈍い赤褐色	
20	1号塚攪乱	土器 かわらけ		(5.2)		底部	ロクロ成形	やや密	褐色	
21	1号塚攪乱	土器 かわらけ		(5.0)		底部	ロクロ成形	やや密	褐色	
22	1号塚攪乱	土器 かわらけ		(5.2)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い褐色	
23	集石状透構	土器 かわらけ	(7.2)	(5.0)	(1.6)	口縁 -底部	ロクロ成形	やや密	内面/褐色 外面/鈍い黄褐色	
24	集石状透構	土器 かわらけ		(6.0)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
25	4号石列南	土器 かわらけ		(6.0)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
26	4号石列南	常滑 甕				胴部	内面茶頭嵌	密	内面/鈍い赤褐色 外面/灰黄色	
27	4号石列南	石製品 茶臼				上臼	軸挿孔直径約(2.1)cm			
26	1号土坑	土器 かわらけ	(13.6)	(6.4)	(2.7)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	浅黄褐色	
2	1号土坑	土器 かわらけ	(9.4)	(5.0)	(2.3)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
3	1号土坑	土器 かわらけ	(9.9)	(5.0)	(2.2)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
4	1号土坑	土器 かわらけ	(9.4)	(5.0)	(2.1)	口縁 -底部	ロクロ成形	やや密	褐色	
5	1号土坑	土器 かわらけ	(10.0)	(6.2)	(2.0)	口縁 -底部	ロクロ成形	やや密	褐色	
6	1号土坑	土器 かわらけ	(11.2)			口縁 -体部	ロクロ成形	やや密	明赤褐色	
7	1号土坑	土器 かわらけ	(9.2)			口縁 -体部	ロクロ成形	やや密	褐色	
8	1号土坑	土器 かわらけ		(9.0)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
9	1号土坑	土器 かわらけ		(7.5)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い褐色	
10	1号土坑	土器 かわらけ		(5.6)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
11	1号土坑	土器 かわらけ		(4.6)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
12	1号土坑	土器 かわらけ		(5.4)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
13	1号土坑	白磁 碗反里				口縁部		緻密	灰白色	15c後半~16c前半
14	1号溝	土器 かわらけ	(16.2)	(10.0)	(3.1)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	明赤褐色	
15	1号溝	土器 かわらけ	(12.4)	(7.2)	(2.7)	口縁 -底部	ロクロ成形	やや密	明赤褐色	
16	1号溝	土器 かわらけ	(11.2)	(7.2)	(2.1)	口縁 -底部	ロクロ成形	やや密	明赤褐色	
17	1号溝	土器 かわらけ		(4.0)		底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	内面/鈍い赤褐色 外面/鈍い黄褐色	
18	1号溝	常滑 甕				胴部	へら削り、内面塗付書	やや密	内面/鈍い赤褐色 外面/暗褐色	



図番	出土位置	種別・器種	法 量 (cm)			部位	観察所見(調整・文様・その他)	胎土	色 潤	備考(時代等)
			口径	底径	器高					
26	19 2号溝	土器 かわらけ	(9.2)	(6.0)	(1.8)	口縁 -一部	ロクロ成形	やや密	明赤褐色	
20	2号溝	土器 かわらけ	(13.4)			口縁 -一部	ロクロ成形	やや密	褐色	
21	2号溝	土器 かわらけ	(13.2)			口縁 -一部	ロクロ成形	やや密	明赤褐色	
22	2号溝	土器 かわらけ	(5.9)			底部	ロクロ成形	やや密	鈍い褐色	
23	2号溝	常滑 甕				胴部		やや密	灰褐色	
24	2号溝	土製品 甕上							褐色	
25	3号溝	土器 かわらけ	(4.8)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	明赤褐色	
26	5号溝	土器 かわらけ	(10.0)			口縁 -一部	ロクロ成形	やや密	浅黄褐色	
27	5号溝	土器 かわらけ	(7.6)			口縁 -一部	ロクロ成形	やや密	鈍い赤褐色	
28	5号溝	土器 かわらけ				口縁部	ロクロ成形	やや密	明赤褐色	
29	6号溝	土器 かわらけ	(6.6)			口縁 -一部	ロクロ成形	やや密	褐色	
30	6号溝	土器 かわらけ	(10.0)			底部	ロクロ成形	やや粗	褐色	
31	6号溝	土器 かわらけ				口縁部	ロクロ成形	やや密	褐色	
27	1 7号溝	土器 かわらけ	(10.4)	(5.6)	(2.9)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
2	7号溝	土器 かわらけ	(6.0)			底部 -一部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い褐色	
3	7号溝	土器 かわらけ	(6.0)			底部	ロクロ成形	やや密	褐色	
4	7号溝	土器 かわらけ	(7.0)			底部	ロクロ成形	やや密	褐色	
5	7号溝	土器 かわらけ	(6.8)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い褐色	
6	7号溝	土器 かわらけ	(5.0)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り、 瓦質化、溶融物付着	やや密	黄灰色	
7	7号溝	土器 片口鉢(?)				口縁部	内面横ナデ	やや密	鈍い褐色	
8	7号溝	塗付 壺(?)				底部	高台臺付-底部無輪	密	灰白色	
9	ピット9	土器 かわらけ	(6.0)			口縁 -一部	ロクロ成形	やや密	鈍い赤褐色	
10	ピット16	土器 かわらけ	(6.6)			底部	ロクロ成形	やや密	鈍い褐色	
11	ピット16	青磁 碗				口縁部	銅掻塗井文	密	粘土/灰白色 釉/オリーブ灰色	15c後半-16c初頭
12	1トレ 水田造成土	土器 かわらけ	(13.4)	(5.8)	(2.5)	口縁 -一部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	浅黄褐色	図9-9層出土
13	1トレ 水田造成土	白磁 皿	(5.0)			底部	高台臺付無輪	緻密	灰白色	15c後半-16c前半 図9-9層出土
14	1トレ 水田造成土	土器 狸鉢(?)				底部		やや密	褐色	図8-6層出土
15	1トレ 水田造成土	瀬戸美濃 灰釉燗反皿				口縁部		密	粘土/浅黄褐色 釉/黄褐色	大塚1(?) 図8-6層出土
16	1トレ 整地層	土器 かわらけ	(11.4)	(6.0)	(2.2)	口縁 -一部	ロクロ成形、底部回転糸切り、 瓦質化、内面溶融物付着	やや密	灰黄色	図9-14層出土
17	1トレ 整地層	土器 かわらけ	(11.6)			口縁 -一部	ロクロ成形	やや粗	褐色	図9-14層出土
18	1トレ 整地層	土器 かわらけ	(8.0)	(4.0)	(2.0)	口縁 -一部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	褐色	図9-14層出土
19	1トレ 整地層	青磁 碗				底部 下平	銅掻井文	緻密	粘土/灰白色 釉/明緑灰色	13c後半-14c前半 図9-14層出土
20	1トレ 整地層	土器 かわらけ	(11.4)	(7.0)	(2.4)	口縁 -一部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	図7-16層出土
21	1トレ 整地層	土器 かわらけ	(13.6)	(7.0)	(2.8)	口縁 -一部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	図7-16層出土
22	1トレ 整地層	常滑 甕				頸部		密	灰褐色	図7-16層出土
23	1トレ 整地層	土器 かわらけ	(7.0)	(4.0)	(1.9)	口縁 -一部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	図7-16層出土
24	1トレ 整地層	土器 かわらけ	(5.8)			口縁 -一部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い褐色	図7-16層出土
25	1トレ一括	土器 かわらけ	11.9	7.0	2.7	口縁 -一部	ロクロ成形、底部回転糸切り、 口縁部スス付着	やや粗	鈍い褐色	
26	1トレ一括	土器 かわらけ	(12.4)	(7.2)	(2.4)	口縁 -一部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	

40	出土位置	種別・器種	法 量 (cm)			部位	観察所見(調整・文様・その他)	胎土	色 調	備考(時代等)
			口径	直径	器高					
27	1トレー一括	土器 かわらけ	(10.5)	(5.2)	(3.0)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
28	1トレー一括	土器 かわらけ	(10.8)	(5.8)	(2.6)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	褐色	
29	1トレー一括	土器 かわらけ	(11.2)	(6.2)	(2.4)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	褐色	
30	1トレー一括	土器 かわらけ	(10.4)	(5.8)	(2.8)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	褐色	
31	1トレー一括	土器 かわらけ	(10.4)	(5.4)	(2.7)	口縁 -底部	ロクロ成形、加熱による瓦質化、 内面溶融物付着	密	明褐色	
32	1トレー一括	土器 かわらけ	(10.6)	(5.4)	(2.2)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
33	1トレー一括	土器 かわらけ	(7.2)	(5.2)	(1.3)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
34	1トレー一括	土器 かわらけ	7.9	5.1	2.0	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
35	1トレー一括	土器 かわらけ	(7.4)	(5.0)	(1.6)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	褐色	
36	1トレー一括	土器 かわらけ	(6.4)	(3.6)	(1.8)	口縁 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
37	1トレー一括	土器 かわらけ	(11.2)			口縁 -胴部	ロクロ成形、口縁部炭化物付着	やや密	鈍い褐色	
38	1トレー一括	土器 かわらけ	(10.0)			体部 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	緑灰黄色	
39	1トレー一括	土器 かわらけ	(7.4)			体部 -底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	浅黄褐色	
40	1トレー一括	土器 かわらけ	(9.0)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
28	1トレー一括	土器 かわらけ	(6.0)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
2	1トレー一括	土器 かわらけ	(6.4)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	褐色	
3	1トレー一括	土器 かわらけ	(5.4)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	褐色	
4	1トレー一括	土器 かわらけ	(5.4)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	褐色	
5	1トレー一括	土器 かわらけ				底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
6	1トレー一括	土器 撥鉢	(20.8)	(15.4)	(6.8)	口縁 -底部	ロクロ整形	やや密	褐色	
7	1トレー一括	瀬戸美濃 火目茶碗				体部 下半	体部下半露胎	緻密	胎土/浅黄褐色 釉/暗褐色	
8	1トレー一括	瀬戸美濃 灰釉丸碗				口縁部	鈎形印花文	密	胎土/灰白色 釉/浅黄褐色	大窯1
9	1トレー一括	常滑 甕				口縁部		密	内面/鈍い赤褐色 外面/灰褐色	1500-1550年
10	1トレー一括	白磁 端反皿				底部	高台登付無釉	緻密	灰白色	15c後半-16c前半
11	1トレー一括	染付 皿				底部	見込部獅子文様	緻密	灰白色	
12	1トレー一括	染付 皿				底部		緻密	灰白色	
13	1トレー一括	染付 皿				体部		緻密	灰白色	
14	1トレー一括	染付				体部	陶胎	密	胎土/浅黄褐色 釉/灰白色	
15	2トレー一括	土器 かわらけ	(6.0)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	鈍い黄褐色	
16	2トレー一括	土器 かわらけ	(5.0)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
17	3トレー一括	瀬戸美濃 灰釉丸皿	(4.3)			底部	割出高台、底部外面輪下子 見込部トチン根・横拭き取り	密	胎土/灰白色 釉/浅黄褐色	
18	4トレー一括	土器 かわらけ	(5.4)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り、 底部外面にタル付着	やや密	褐色	
19	4トレー一括	青磁 碗				体部		密	胎土/灰白色 釉/明緑灰色	
20	表探	石製品 石臼				下臼				
29	1表探	石製品				口縁部・内面に磨面				
2	表探	石製品								

# 第4章 無名曲輪

## 第1節 調査概況

### 1. 調査地の概要

無名曲輪は南北約100m、東西約60mの規模を有する主郭部北側曲輪の一つである。味噌曲輪と御隠居曲輪の間に位置し、堀と土塁が巡ると推定される。館が単郭構造から複郭構造へと変遷する過程で増設された曲輪の一つであり、その時期は天文21年(1552)から天正10年(1582)の間と理解されている。大洲藩主加藤家の事跡を収録した『北藤録』には、文禄元年(1591)、甲斐国領主となった加藤光泰が「南北二外郭ヲ築」いたと記録され、この「外郭」を無名曲輪と解釈する考えもある。各種古絵図の中で「諸国古城之図」(広島市立中央図書館浅野文庫)は、土塁で囲まれた不整形な曲輪として描き、近世の地誌類が他の曲輪の伝承や別称を伝えるのに対し、無名曲輪に関する記述は全く見えない。そのため曲輪として認識されていたか不明である。すでに江戸時代から耕地化が進み、周辺一帯は「富トナレリ」(『甲斐国志』)という状態であった。

現在は土地区画や微地形観察から僅かに土塁と堀の痕跡が確認でき、曲輪内は段状に区画され、畑地、水田として利用されている。中央の一段高い畑地を土塁の痕跡とし、南北に二分する構造と推定される。

### 2. 調査の方法と経過

調査は、平成12年9月6日から開始した。一段高い畑地とその下段の水田に幅2m、長さ11mのトレンチを南北方向にそれぞれ設定し、表土から人力により掘り下げ調査を行った。下段をトレンチ1、上段をトレンチ2とし、トレンチ1からは盛土に伴う暗渠水路、ピット列、溝跡を、トレンチ2から堀と推定される落ち込みと土塁を確認し、3時期の変遷が想定された。11月10日までに記録図面の作成、写真撮影を終え、12月19日に航空写真測量を、翌20日には調査団会議を開催し、現地説明を実施している。川砂・土囊により養生処置を行ったのち、重機で埋戻し、12月28日にいったん調査を終了した。

トレンチ2で検出した堀が不確定であったため、平成13年3月8日から調査を再開した。トレンチを幅4mに拡大し、長さ21mにわたり延長した。便宜上、新たに設定したトレンチを土地区画によりトレンチ3、4としている。堀の確認とともに新たな土塁を検出し、二重土塁となるなど複雑な変遷をたどることが判明した。5月11日に航空写真測量を行い、5月18日までに記録図面作成、記録写真の撮影を終えている。6月15日に調査団会議を開催し現地説明を行い、川砂・土囊により養生処置を行ったのち、重機で埋戻し、6月20日には全ての調査を終了した。

## 第2節 調査の成果

### 1. 基本層序

最下段となるトレンチ1地点は、地表下約0.3mが遺構確認面となる。水田として土地利用されていたため耕作土、床土が覆うのみである。トレンチ北端は床土直下が地山となり、

南側には盛土が確認された。トレンチ中央を境に40cmほどの段差があり、この盛上により段差を埋めていた。上段に構築された遺構の拡張にともない平場空間を確保するため行われたものと考えられる。

一段高い畑地に設定したトレンチ2～4は、約0.1～0.3mの表土が覆うのみであった。畑地は北から南にかけて傾斜し、約2mの比高差がある。埋没した堀を利用して新たな土塁が築かれる一方で、整地層により埋没する土塁がある。地表下約1mが地山面となるため、堆積土の多くは盛土整地層となる。

## 2. 遺構と遺物

### (1) 土 塁

調査により3基の上塁を検出した。いずれも高さ1m、幅3～4mほどの規模であり、山輪内を区分する低土塁と推定される。掻き上げ土塁とでも分類されるものであり、基底部に整地が若干認められる程度で、搦き固めと考えられる顕著な上層は確認されない。

#### 1号土塁（図31）

トレンチ3で確認された、東西方向の上塁であり、南側から検出した堀と一対になる。基底部幅2.90m、高さ0.72mを測る低土塁である。その高さは、西側で徐々に低くなり、トレンチ西壁では高さ0.40mほどとなる。西側で土塁が途切れ、開口部が存在する可能性がある。粘質土と石混じり土が互層となるが、搦き固めと考えられる土層は観察できなかった。堀面に面した土塁裾部には長径0.64m、高さ0.20mの石が据えてある。土留めと考えられるが、列構成あるいは石積の様相も見られず、一石のみの検出であった。上層観察から、2号土塁構築時の盛土整地（整地層Ⅰ）により裾部が約0.30m埋没し、最終期、さらなる盛土整地（整地層Ⅱ）により完全に埋没している。

出土遺物はかわらけ、香炉がある（図34-1～4、図36-17）。

#### 2号土塁（図32）

トレンチ4から検出された、東西方向の上塁である。基底部幅4.90m、高さ1.00mを測り、先行する石積遺構、2号溝を埋め、盛土整地後に構築されている。すでに1号上塁が存在し、その約10m北側に新たに築造される。土層観察では、石混じり土が基底層となり、その上に褐色、黄褐色粘質土が盛られている。北側へ約2.60m、拡張部分が認められる。1号土塁とともに盛土整地（整地層Ⅱ）により埋没し、平坦地化する。

出土遺物はかわらけ、瀬戸美濃天目、染付端反皿がある（図34-9・10・12・15・17・19）。拡張部から出土した遺物は、図34-11・16・25・26・29・31～33に凶化した。

#### 3号土塁（図31）

トレンチ2で確認され、基底部幅4.90m、高さ1.8mを測る。東西方向に構築された土塁である。北側に存在する堀が自然埋没した後に整地され、築造されている。南側裾部に土留めと考えられる石積と雨水処理の溝跡が確認された。石積に使用する石材は不揃いで、長径0.15～0.70mまであり、土層観察では、基底部から0.30mほどは土中に埋まっていたことになる。土塁表面を石混じり土が覆い、内部は粘質土が盛土される。この土塁には拡張の痕跡が認められ、土留めの石積と雨水処理の溝跡を埋め、裾部で約1.20m、南側に幅を広げている。

出土遺物はかわらけ、石製品がある（図35-1～7）。

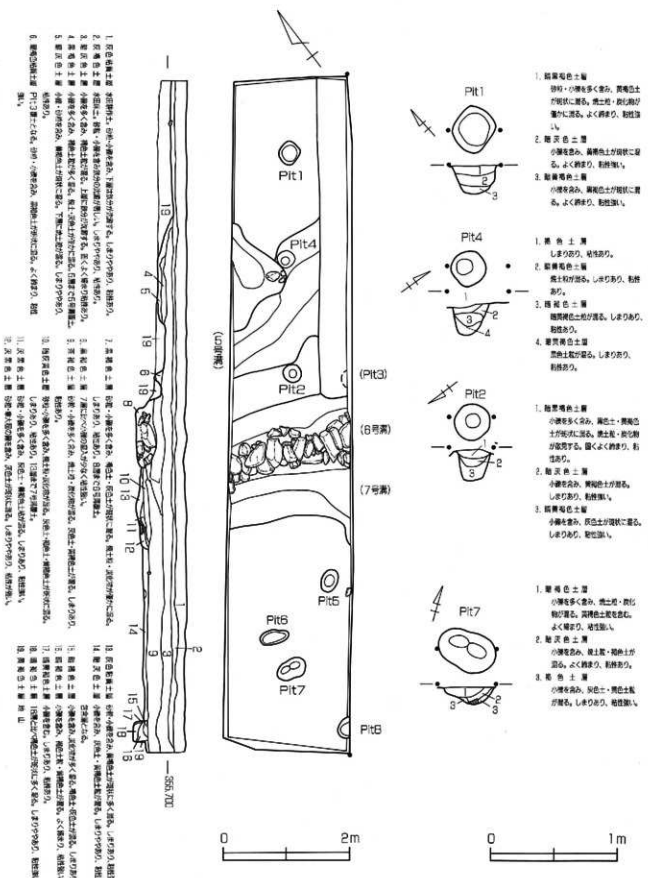


図30 無名曲輪トレンチ1平面図・セクション





## (2)堀 (図31)

トレンチ 2、3 で確認された。北側から検出された 1 号土塁と対になる。上幅 4.18m、底部幅 0.90m、深さ 3.32m を測り、断面箱堀状を呈する水堀と推定される。調査時にも湧水がみられ、堀底から高さ約 2.10m まで自然埋没し、グライ化した砂粒と粘質土がレンズ状に堆積していた。自然埋没した後、厚さ約 0.64m の盛土整地が行われ、3 号土塁が構築されている。3 号土塁構築後も堀跡は、窪みとしてその痕跡を残していた。土層観察から、1 号土塁が盛土整地（整地層 II）により完全に埋没するのと同時期に、堀跡も整地され埋没したことが分かる。

遺物は、かわらけが出土している（図 35-16・17・21・22）。いずれも 3 号土塁構築時の整地層からの出土である。

## (3)石積遺構 (図32)

トレンチ 4 から検出し、2 号土塁に先行し、2 号溝を埋めて構築している。南北方向にわたり長さ 4.60m、3 段の石積となる。自然石を使用し、石材の規格は長径 0.10~0.92m と様々である。屋敷境の石積と考えられ、2 号溝・1 号土塁・堀などと直交する軸線をとる。

遺物は、かわらけが 2 点出土している（図 36-1・2）。

## (4)溝状遺構

調査では 7 条の溝跡を検出した。用途・性格が不明瞭で、溝と表現すべきか定かでないものも含んでいる。

### 1 号溝 (図31)

トレンチ 2 で確認し、3 号土塁南側の裾部から検出している。土塁裾部に設けられた雨水処理の溝と考えられ、幅 0.34~0.68m、深さ 0.24m を測る。東から西へと傾斜し、トレンチ西壁際ではビット状に深くなる。土層観察では、土塁側からの崩落土らしき堆積が確認され、土塁の拡張により埋められている。

### 2 号溝 (図32)

トレンチ 4 から検出し、石積遺構・2 号土塁と重複する。東西方向にわたり長さ 4.24m、幅 1.60~1.80m、深さ 0.44m を測り、西側に流下する。北側が一段高い平場となるため、地境に設けられた溝であろうか。石積遺構・土塁構築時の盛土整地（整地層 I）などにより埋没している。

### 3 号溝 (図31)

3 号土塁南側から検出し、幅 1.00~1.48m、深さ 0.26m を測る。地山面に茶褐色土の広がりの確認でき、覆土中に大量の礫が混入していた。溝底、立ち上がり部分ともに不明瞭であったため溝跡となるか定かではない。土層観察では、3 号土塁構築以前に機能する溝となる。

### 4 号溝 (図32)

部分的であるがトレンチ 3、4 の西壁際から検出している。南北方向にわたり長さ 9.40m、幅 1.10m、深さ 0.28m ほどの規模となる。石積遺構と平行し、流下する溝と考えられる。2 号土塁構築時の盛土（整地層 I）によって、石積遺構とともに埋没する。土層堆積



には、観察地点により整合しない部分がある。埋没後、同一地点に新たな溝が設けられ、新旧二時期の溝が存在する可能性もある。

出土遺物は、かわらけが1点のみである(図36-5)。

#### 5号溝(図30)

トレンチ1から検出し、幅1.74m、深さ0.24mほどを測る。地山面を掘り込んでおり、覆土中には焼土粒が散見し、特に溝底に多く混入していた。立ち上がり部が不明瞭で、不整形な形状をなし、溝となるか定かではない。

かわらけ、瀬戸美濃天目茶碗が出土した(図36-3・4)。

#### 6号溝(図30)

トレンチ1から7号溝と重複して検出された。東西方向にわたり、幅1.92m、深さ0.41mを測り、石組暗渠となる。溝底に長径0.10~0.50mほどの礫を使い、石組により蓋石をかけている。土層観察からは盛土整地(整地層Ⅲ)に際し、構築されたことが明らかである。もともと北側が一段高い平場となっていたらしく、盛土整地による平場面拡大にともしない設けられた排水溝となろう。

多くの遺物が石組周辺から出土している。かわらけ、瀬戸美濃天目茶碗、灰釉丸皿、灰釉端反皿、志戸呂搦鉢などがある(図36-5~10)。

#### 7号溝(図30)

トレンチ1から6号溝と重複して検出された。東西方向にわたり、西流する溝となるが、6号溝構築により幅1.28m、深さ0.20mを確認するのみである。盛土整地(整地層Ⅲ)以前に機能していたことは明らかであり、一段高い北側平場との間に設けられた地境の溝と推定される。

#### (5)ピット

トレンチ1から8基を確認している。ピット1・2・4が南北方向に直線的に並び柵列と推定される以外は、散在して検出された。いずれのピットからも出土遺物はなく、柱の痕跡なども確認できなかった。柵列と推定されるピット1と4の間が1.70m、ピット2と4の間は1.80mを測り、径0.28~0.38m、深さ0.22mほどの規模となる。

表5 ピット一覧表(無名曲輪)

( ) = 現存値 単位: cm

番号	平面形態	長軸	短軸	深さ	土層堆積	備考(重複関係等)
1	不整形	34	30	22	焼土・炭化物を含む。	柵列を構成。
2	略円形	28	27	22	焼土・炭化物を含む。	柵列を構成。
3	円形?	13	?	7	黒色土粒が混じる。	整地層Ⅲが覆う。
4	略円形	27	26	25	焼土を含む。暗黄褐色土粒・黒色土粒が混じる。	柵列を構成、5号溝と重複。
5	楕円形	36	26	6	焼土粒が混じる。	
6	長楕円形	46	22	5	焼土粒が混じる。	
7	楕円形	46	31	13	焼土・炭化物を含む。	
8	楕円形?	(36)	24	22	炭化物が混じる。	整地層Ⅲが覆う。

#### (6)盛土整地層

調査の過程において、盛土整地の痕跡を確認した。館廃絶後の耕地化にともなう整地と区別するのは明確ではないが、面的に広範囲に及ぶと考えられるもの、土層が水平堆積を繰り返すことにより、結果的に水平面を造作しているものを盛土整地と捉えた。

##### 整地層Ⅰ（図31・32）

トレンチ3・4から確認された。東西方向への広がりには定かではないが、南北方向にわたり約15.3mの範囲にみられる。トレンチ西壁際から検出した石積遺構は、この盛土により埋められている。2号土塁構築に際して行われたものであり、北側平場との高低差を埋め1号土塁裾部にまで厚さ約0.3mの盛土が及んでいる。依然として1号土塁は機能し続け、約10mの間隔を以て2号土塁が築造される。

出土遺物には、かわらけ、片口鉢、捏鉢、染付碗がある（図34-20-24、図36-18-23・25-27・30）。

##### 整地層Ⅱ（図31・32）

トレンチ3・4から確認された。1号土塁と2号土塁の間、及び1号土塁と3号土塁の間にみられる。約1mに及ぶ盛土により1号、2号土塁は完全に埋没し、1号土塁と3号土塁の間に窪みとして残っていた堀の痕跡も整地され平場空間となる。この際、3号土塁は拡張され、さらに嵩上げされた可能性がある。土塁南側には大量の石が混じり、北側から南側へ傾斜する土層（図31東壁50-52層）が堆積する。この堆積上を削平により崩された土砂と推定し、土塁天端の土層堆積が水平となっているのも上部を削平した痕跡と指摘できよう。拡張した痕跡は確実に認められるが、嵩上げされた痕跡は不明瞭であり可能性のみが指摘できる。約20mに及ぶ平場空間が造作されたことになるが、その南側には3号土塁を拡張し、大規模化した土塁が構築されたことになる。

出土遺物は、大部分がロクロ成形され、底部に糸切り痕を残すかわらけ片である。他に摺鉢、捏鉢、瀬戸美濃鉄軸合子、瀬戸美濃摺鉢がある（図34-5-8・13・14・18・27・28・30、図35-8-15・18-20、図36-24）。

##### 整地層Ⅲ（図30）

トレンチ1から確認された。トレンチ中央を境に北側は一段高い平場となっていたらしく、盛土整地により平坦面を拡大している。南北方向にわたり約8.4mの範囲にみられ、厚さ約0.1-0.4m盛土される。もとの地形では段差が存在し、地山と整地層の境になる箇所を意識して石組暗渠を設けている。平坦面の拡大を意図して行われているが、上段で確認した盛土整地（整地層Ⅱ）にともない同時に実施されたと考えられる。上段に約20mの平場空間が造作され、かつ3号土塁が拡張された結果、平場空間が狭くなり拡大する必要が生じたためと解釈できる。

かわらけ、青磁碗、白磁端反皿が出土する（図36-12-16）。

#### (7)遺構外出土遺物（図36-28・29・31-33、図37）

各トレンチ一括出土遺物を取りあげる。多くの遺物が出土しているが、大部分はかわらけ片であり、フイゴ羽口・鉛玉・銭貨も見られた。

かわらけは全てロクロ成形され底部に糸切り痕を残すものであり、二次的に使用され、スズなどが付着するもの（図36-28、図37-1・2・8・11）がある。他に、摺鉢・鍋鉢・染付碗・瀬戸美濃天目・灰軸皿などがある。

### 第3節 小 括

南北方向にわたり約40mの範囲を調査し、多くの遺構・遺物を検出するとともに新たな知見を得ることができた。検出した遺構は重複関係あるいは盛土整地状況から何時期かの変遷が捉えられている。個々の遺構すべてについてその変遷過程を追うことは困難であるが、盛土整地を画期として様相は大きく変化し、大別して3段階の時期変遷を把握した。

#### I 期

1号土塁・堀・2号溝・7号溝などが存在すると考えられる。地山面の検出レベルなどから、確認した範囲で地形は約0.2~0.8mの段差を生じつつ4段程度に成形されており、土塁・溝などは上段と段差が生じる部分に構築されている。検出された土塁は、堀と一対となり高さ1mほどの低土塁となる。段差部分を利用して構築することにより数値以上の高さが存在したことになる。地形的制約により、曲輪内は段構造となり、そのため発生する段差を活用して土塁などが配置されている。

#### II 期

1号土塁北側には、新たに盛土整地（整地層Ⅰ）が行われ、約10m離れ2号土塁が構築される。かつ自然埋没した堀跡を整地し、3号土塁が築造されている段階とする。盛土整地により1号土塁裾部は0.3mほど埋まるが、依然として存在し、堀跡は窪みとして残っており1号・3号土塁が近接して平行する。調査では、2号土塁と3号土塁が同時に築造されたか判断できなかったが、次段階には盛土整地により同時に埋没していることから、一時期、同時に存在したと推定した。

1号土塁と2号土塁は、単に曲輪内を仕切る土塁として存在したのか、あるいは桁形などを構成するのか定かでない。埋没した堀に代わり新たに土塁を築き、二重土塁とするなど複雑な様相となる。

#### III 期

約1mに及ぶ盛土整地（整地層Ⅱ）が行われ、1号・2号土塁は完全に埋没し、窪みとして残っていた堀跡も整地され平坦地化する。広さ約20mの平場空間が造作されるが、この際、3号土塁は南に拡張され、大規模化する。こうした一連の変化によって、南側空間は狭くなり、平場空間を拡大する必要から盛土整地（整地層Ⅲ）が行われている。4段ほど存在した平場空間は、拡大して2段となる。ここでも段差部分を活用して土塁が配置されている。

盛土整地を画期として、3段階の変遷を推定したが、2号土塁には拡張の痕跡があり、3号土塁の構築期も課題として残っている。各期の間にはもう一段階推定できるかもしれない。盛土整地を画期としたため必ずしも連続する変遷とはならず、各期の間さらなる変遷が推定できる。今後の検討課題となろう。

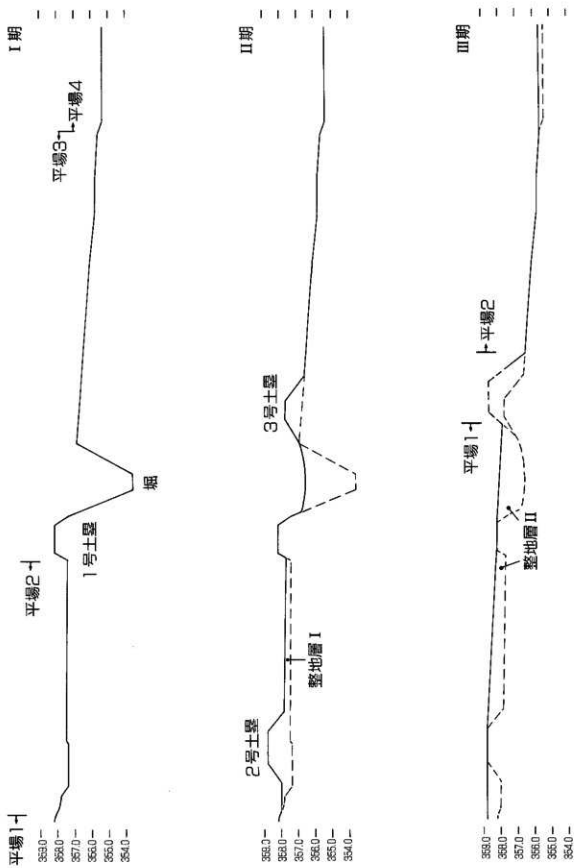


图 33 渠外田整地工程推定图

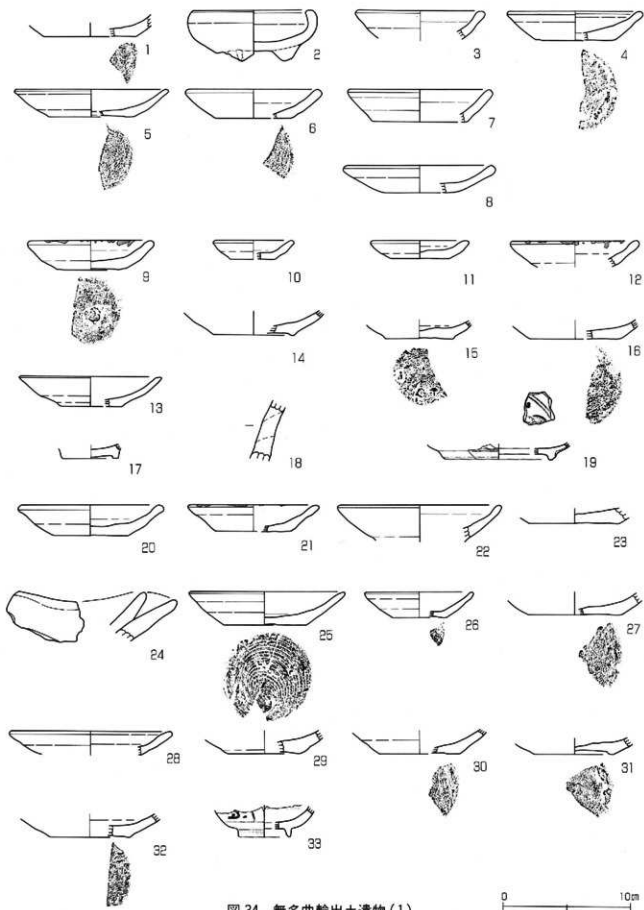


图 34 無名曲輪出土遺物(1)

0 10cm

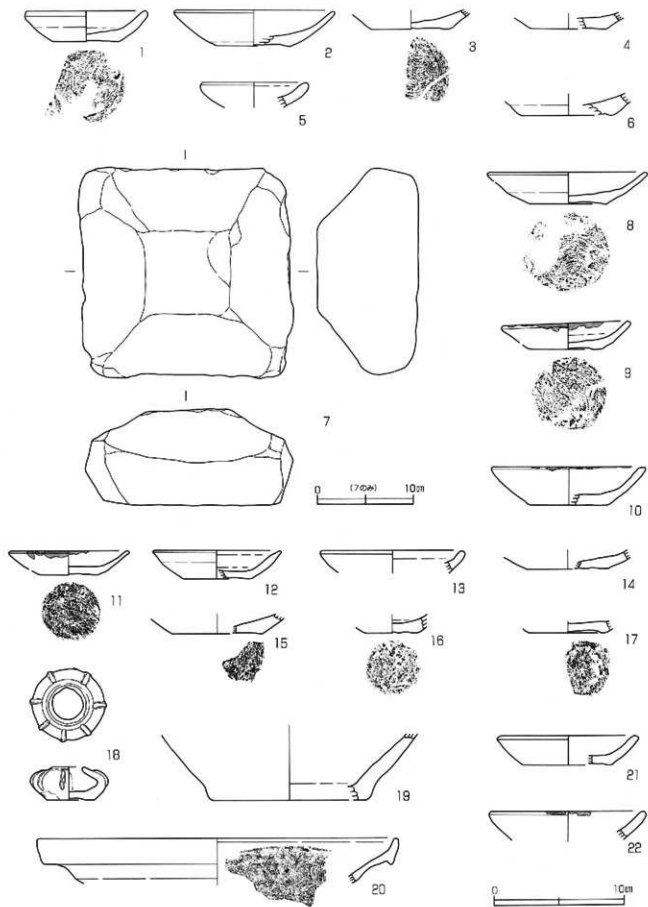


图 35 無名曲輪出土遺物(2)

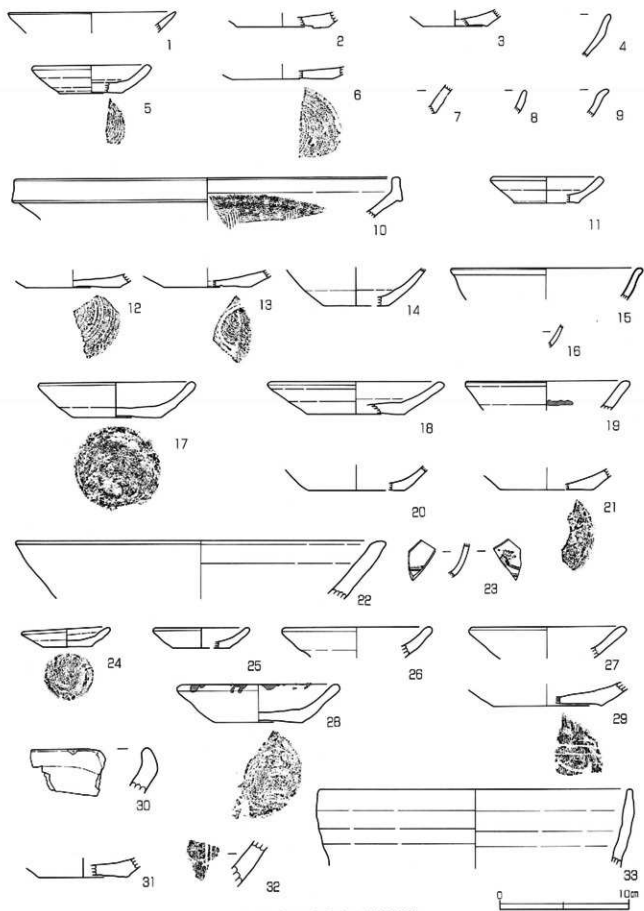


图 36 無名曲輪出土遺物 (3)

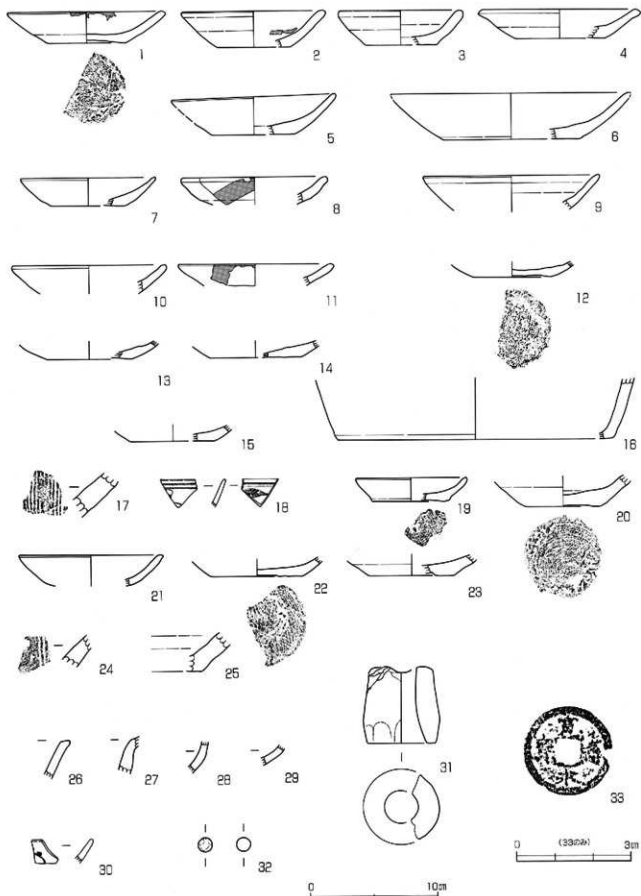


图 37 無名曲輪出土遺物(4)



表6 無名曲輪出土遺物観察表

( ) 表元誌

図号	出土位置	種別・器種	寸法 (cm)			部位	観察所見 (調染・文様・その他)	胎土	色調	備考(時代等)
			口縁	底径	高さ					
34	1号土壘	土器 かわらけ		(7.2)		体部 ~ 底部	ロクロ成形	やや密	明赤褐色	
32	1号土壘	土器 香炉	9.4	5.8	4.0	完形	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	明赤褐色	
33	1号土壘	土器 かわらけ	(9.8)			口縁 ~ 体部	ロクロ成形	やや密	褐色	
4	1号土壘	土器 かわらけ	(10.4)	(6.4)	(2.3)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
5	惣地層II 1号土壘北	土器 かわらけ	(11.8)	(6.6)	(2.2)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
6	惣地層II 1号土壘北	土器 かわらけ	(10.2)	(6.0)	(2.3)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
7	惣地層II 1号土壘北	土器 かわらけ	(11.0)	(7.5)	(2.6)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形	やや密	褐色	
8	惣地層II 1号土壘北	土器 かわらけ	(11.6)			口縁 ~ 底部	ロクロ成形	やや密	褐色	
9	2号土壘	土器 かわらけ	(9.4)	(5.4)	(2.3)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り 口縁部スス付着	やや密	褐色	
10	2号土壘	土器 かわらけ	(6.0)	(3.6)	(1.5)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形	密	褐色	
11	2号土壘 惣室部	土器 かわらけ	(9.4)	(4.6)	(1.4)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
12	2号土壘	土器 かわらけ	(7.8)			口縁 ~ 体部	ロクロ成形、口縁部タール付着	密	褐色	
13	惣地層II 2号土壘南	土器 かわらけ	(11.0)	(4.8)	(2.4)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
14	惣地層II 2号土壘南	土器 かわらけ	(6.4)			体部 ~ 底部	ロクロ成形	やや密	褐色	
15	2号土壘	土器 かわらけ	(5.2)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
16	2号土壘 惣室部	土器 かわらけ	(7.0)			底部	ロクロ成形	やや密	褐色	
17	2号土壘	瀬戸美濃 大目茶碗	4.4			底部	削り出し高台、柄杓	密	胎土/浅黄褐色 粘/黒褐色	大甕1
18	惣地層II 2号土壘南	土器 椀鉢(?)				体部	ロクロ成形	やや密	明赤褐色	
19	2号土壘	染付 壺反皿	(8.4)			底部	高台部へラ削り	緻密	灰白色	15c後半~16c中頃
20	惣地層I	土器 かわらけ	(10.8)	(5.8)	(2.4)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	褐色	
21	惣地層I	土器 かわらけ	(9.8)	(5.8)	(1.9)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、口縁部スス付着	やや粗	褐色	
22	惣地層I	土器 かわらけ	(12.6)			口縁 ~ 体部	ロクロ成形	密	褐色	
23	惣地層I	土器 かわらけ	(7.0)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
24	惣地層I	土器 片口鉢				口縁部		やや密	褐色	
25	2号土壘 惣室部	土器 かわらけ	12.1	6.6	2.6	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	褐色	
26	2号土壘 惣室部	土器 かわらけ	(8.2)	(4.2)	(2.0)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り 被熱により瓦質化、内面溶融物付着	密	内面/褐灰色 外面/灰白色	
27	惣地層II 1号土壘北	土器 かわらけ	(7.4)			体部 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	褐色	
28	惣地層II 2号土壘南	土器 かわらけ	(12.4)			口縁 ~ 体部	ロクロ成形	やや密	褐色	
29	2号土壘 惣室部	土器 かわらけ	(5.6)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
30	惣地層II 2号土壘南	土器 かわらけ	(6.4)			体部 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	褐灰色	
31	2号土壘 惣室部	土器 かわらけ	(6.2)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り 被熱により瓦質化、内面溶融物付着	やや粗	灰白色	
32	2号土壘 惣室部	土器 かわらけ	(6.2)			体部 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
33	2号土壘 惣室部	染付 碗	(4.2)			体部 ~ 底部		緻密	灰白色	
35	1号土壘	土器 かわらけ	(9.6)	(5.2)	(2.4)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
2	3号土壘	土器 かわらけ	(12.2)	(5.8)	(2.8)	口縁 ~ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	褐色	
3	3号土壘	土器 かわらけ	(6.2)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	褐色	
4	3号土壘	土器 かわらけ	(5.8)			底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	密	褐色	

調査号	出土位置	種別・器種	法基 (cm)			部位	観察所見(調整・文様・その他)	粘土	色調	備考(時代等)		
			口径	底径	器高							
35	5	3号土器	土器	かわらけ	(8.4)		口縁 - 底部	口クロ成形	密	褐色		
"	6	3号土器	土器	かわらけ	(7.2)		口縁 - 底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色		
"	7	3号土器	石製品	五輪苎				火輪				
"	8	竪地層II 1号塚	土器	かわらけ	(12.2)	6.0	2.5	口縁 - 底部	口クロ成形、底部回転糸切り	密	鈍い褐色	
"	9	竪地層II 1号塚	土器	かわらけ	(9.7)	5.7	2.0	口縁 - 底部	口クロ成形、底部回転糸切り 口縁部スス付着	密	鈍い褐色	
"	10	竪地層II 1号塚	土器	かわらけ	(12.0)	(6.1)	(3.0)	口縁 - 底部	口クロ成形、底部回転糸切り 口縁部スス付着	密	褐色	
"	11	竪地層II 1号塚	土器	かわらけ	(9.0)	4.6	1.9	口縁 - 底部	口クロ成形、底部回転糸切り 口縁部スス付着	密	褐色	
"	12	竪地層II 1号塚	土器	かわらけ	(10.0)	(5.4)	(2.2)	口縁 - 底部	口クロ成形、底部回転糸切り	密	褐色	
"	13	竪地層II 1号塚	土器	かわらけ	(11.0)			口縁部	口クロ成形	密	褐色	
"	14	竪地層II 1号塚	土器	かわらけ	(6.2)			体部 - 底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
"	15	竪地層II 1号塚	土器	かわらけ	(7.2)			体部 - 底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
"	16	1号塚埋土	土器	かわらけ		4.2		底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
"	17	1号塚埋土	土器	かわらけ		(5.0)		底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
"	18	竪地層II 1号塚	瀬戸美濃 鉄輪合子		2.4	3.7	2.6	完形	底部ヘラ切り 外周部に給付線7本	密	胎土/灰白色 釉/オリーブ灰色	14c前半~中頃
"	19	竪地層II 1号塚	土器	襷鉢	(12.0)			体部 - 底部	襷鉢摩耗	やや密	褐色	
"	20	竪地層II 1号塚	瀬戸美濃	襷鉢	(28.2)			口縁部	襷鉢	密	胎土/淡黄褐色 釉/陶灰色	大塚2
"	21	1号塚埋土	土器	かわらけ	(10.4)	(6.8)	(2.3)	口縁 - 底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
"	22	1号塚埋土	土器	かわらけ	(12.0)			口縁 - 体部	口クロ成形、口縁部にスス付着	やや密	褐色	
36	1	石棺遺構	土器	かわらけ	(13.0)			口縁部	口クロ成形	密	褐色	
"	2	石積遺構	土器	かわらけ	(7.2)			底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
"	3	3号溝	土器	かわらけ	(5.0)			体部 - 底部	口クロ成形	やや密	鈍い赤褐色	
"	4	5号溝	瀬戸美濃	天目茶碗				口縁 - 体部	焼熟	やや密	胎土/灰白色 釉/薄褐色	大塚2
"	5	6号溝	土器	かわらけ	(8.8)	(5.0)	(2.2)	口縁 - 底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
"	6	6号溝	土器	かわらけ	(8.0)			底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い褐色	
"	7	6号溝	瀬戸美濃	天目茶碗				体部	回転ヘラ削り、体部下平露胎	密	胎土/灰白色 釉/薄褐色	古瀬戸後IV
"	8	6号溝	瀬戸美濃	辰輪丸皿				口縁部		やや密	胎土/灰白色 釉/淡黄褐色	大塚2
"	9	6号溝	瀬戸美濃	辰輪反皿				口縁 - 体部		やや密	胎土/灰白色 釉/オリーブ色	大塚1
"	10	6号溝	志戸呂(?)	襷鉢	(30.2)			口縁部	青錆	密	胎土/灰白色 釉/薄赤褐色	大塚2
"	11	4号溝	土器	かわらけ	(8.4)	(5.1)	(2.1)	口縁 - 底部	口クロ成形	やや密	鈍い褐色	
"	12	竪地層III	土器	かわらけ	(7.4)			底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	淡黄褐色	
"	13	竪地層III	土器	かわらけ	(6.8)			底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
"	14	竪地層III	土器	かわらけ	(5.0)			体部 - 底部	口クロ成形	やや密	褐色	
"	15	竪地層III	青磁	碗	(15.0)			口縁部		緻密	胎土/灰白色 釉/オリーブ色	15c前半
"	16	竪地層III	白磁	碗反皿				体部	口クロ成形	緻密	白色	15c後半
"	17	1号土器	土器	かわらけ	(11.8)	(6.8)	(2.8)	口縁 - 底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	褐色	
"	18	竪地層I 3トレ	土器	かわらけ	(13.2)	(7.6)	(2.6)	口縁 - 底部	口クロ成形	やや密	褐色	
"	19	竪地層I 3トレ	土器	かわらけ	(12.6)			口縁 - 体部	口クロ成形、内面タール付着	やや密	内面/褐色 外面/黒褐色	
"	20	竪地層I 3トレ	土器	かわらけ	(7.4)			体部 - 底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い褐色	

図番号	出土位置	器別・器種	法 量 (cm)			部位	観察所見(調整・文様・その他)	粘土	色 調	備考(時代等)
			口径	底径	器高					
36	21 整地層1 3トレ	土器 かわらけ		(7.2)		体部 -底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	棕色	
37	22 整地層1 3トレ	土器 摺鉢(?)	(29.0)			口縁部	口クロ成形	やや密	棕色	
38	23 整地層1 3トレ	染付 甗				体部	内面磨縁、外面波文(?)	緻密	灰白色	15c後半-16c中頃
39	24 整地層1 4トレ	土器 かわらけ	6.6	3.8	1.4	完形	口クロ成形、底部回転糸切り	やや粗	棕色	
40	25 整地層1 4トレ	土器 かわらけ	(7.2)	(4.4)	(1.6)	口縁 -底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	棕色	
41	26 整地層1 4トレ	土器 かわらけ	(11.2)			口縁 -体部	口クロ成形	やや密	浅黄棕色	
42	27 整地層1 4トレ	土器 かわらけ	(11.8)			口縁 -体部	口クロ成形	密	棕色	
43	28 2トレ一括	土器 かわらけ	(12.2)	(7.0)	(3.0)	口縁 -底部	口クロ成形、底部回転糸切り 口縁部タール付着、被熱	やや粗	黒褐色	
44	29 2トレ一括	土器 かわらけ	(8.6)			底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや粗	棕色	
45	30 整地層1 4トレ	土器 片口鉢				口縁部	横ナデ	やや粗	鈍い棕色	
46	31 3トレ一括	土器 かわらけ		(7.0)		底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや粗	黒褐色	
47	32 2トレ一括	土器 摺鉢				体部		やや粗	浅黄棕色	
48	33 2トレ一括	土器 甗	(24.2)			口縁 -体部		やや粗	棕色	
49	37 1 3トレ一括	土器 かわらけ	(12.0)	(6.2)	(2.5)	口縁 -底部	口クロ成形、底部回転糸切り 口縁部内外面スス付着	やや密	鈍い棕色	
50	2 3トレ一括	土器 かわらけ	(11.4)	(5.8)	(2.9)	口縁 -底部	口クロ成形、底部回転糸切り 見込部タール付着	やや密	明赤褐色	
51	3 3トレ一括	土器 かわらけ	(9.8)	(5.8)	(2.8)	口縁 -底部	口クロ成形	やや密	棕色	
52	4 3トレ一括	土器 かわらけ	(12.2)	(7.0)	(2.3)	口縁 -底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	棕色	
53	5 3トレ一括	土器 かわらけ	(12.9)	(6.5)	(3.0)	口縁 -底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	鈍い棕色	
54	6 3トレ一括	土器 かわらけ	(19.0)	(11.2)	(3.7)	口縁 -底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	黒褐色	
55	7 3トレ一括	土器 かわらけ	(10.6)	(5.8)	(2.2)	口縁 -底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	浅黄棕色	
56	8 3トレ一括	土器 かわらけ	(11.4)			口縁 -体部	口クロ成形 外面体部スス付着	やや密	棕色	
57	9 3トレ一括	土器 かわらけ	(11.8)			口縁 -体部	口クロ成形	やや密	浅黄棕色	
58	10 3トレ一括	土器 かわらけ	(12.2)			口縁 -体部	口クロ成形	やや粗	棕色	
59	11 3トレ一括	土器 かわらけ	(12.2)			口縁 -体部	口クロ成形 内外面タール・スス付着	密	内面/黒褐色 外面/鈍い褐色	
60	12 3トレ一括	土器 かわらけ		(6.0)		底部	口クロ成形、底部回転糸切り	密	棕色	
61	13 3トレ一括	土器 かわらけ		(6.6)		底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	棕色	
62	14 3トレ一括	土器 かわらけ		(7.4)		底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	棕色	
63	15 3トレ一括	土器 かわらけ		(6.6)		底部	口クロ成形、底部回転糸切り	密	浅黄棕色	
64	16 3トレ一括	土器 (内耳) 鉢	(21.2)			体部 -底部		やや粗	棕色	
65	17 3トレ一括	土器 摺鉢				体部		やや密	棕色	
66	18 3トレ一括	染付 甗				口縁部		密	灰白色	
67	19 4トレ一括	土器 かわらけ	(8.6)	(5.8)	1.8	口縁 -底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや密	棕色	
68	20 4トレ一括	土器 かわらけ		6.0		体部 -底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや粗	棕色	
69	21 4トレ一括	土器 かわらけ	(11.6)			口縁 -体部	口クロ成形	やや粗	棕色	
70	22 4トレ一括	土器 かわらけ	(7.2)			底部	口クロ成形、底部回転糸切り	やや粗	鈍い褐色	
71	23 4トレ一括	土器 かわらけ	(6.6)			体部 -底部	口クロ成形、底部回転糸切り	密	棕色	
72	24 4トレ一括	土器 摺鉢				体部		やや粗	浅黄棕色	
73	25 4トレ一括	土器 摺鉢(?)				底部		やや粗	棕色	
74	26 4トレ一括	土器 鉢(?)				口縁部		粗	棕色	

( ) 復元値

図番	出土位置	種別・器種	法 尺 (cm)			部位	観察所見 (調整・文様・その他)	胎土	色 調	備考 (時代等)
			口径	底径	器高					
37	4トレー一括	灰釉陶器 壺(?)				口縁部				
#	28	4トレー一括	瀬戸美濃	天目茶碗			体部	緻密	灰白色 釉/琥珀茶褐色	
#	29	4トレー一括	瀬戸美濃	灰釉皿			体部	やや密	胎土/浅黄褐色 釉/灰白色	
#	30	4トレー一括	染付	碗			口縁部	緻密	灰白色	
#	31	4トレー一括	土製品	フイゴ羽口				粗	褐色	
#	32	4トレー一括	金属製品	緑玉	直径1.1cm・重量7.0g					
#	33	4トレー一括	銭貨		径2.38cm・孔径0.63cm・厚0.13cm					寛永通宝



御隠居曲輪南作業風景



トレンチ状況



土層堆積状況



主郭部調査状況



主郭部調査状況



作業風景

図版 1 御隠居曲輪南・主郭部調査



主郭部調査状況



土塁基底層検出状況



土塁基底層検出遺物



土層堆積状況



作業風景



埋戻し状況

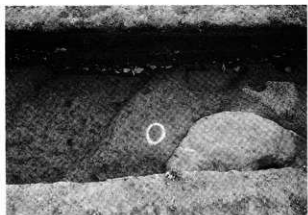
## 図版2 主郭部調査



1号石壁



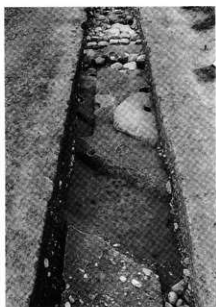
1号石壁



6・9号溝



トレンチ1



トレンチ1



1号土坑

図版3 大手調査



1号石塁東側石積



1号石塁西側石積



1号石塁土層堆積



1号掘



2・3号溝



2・3号土坑、ビット1～3

図版4 大手調査





掘立柱建物跡



作業風景



1号溝石積



1号溝石積



1号溝石積



トレンチ2

図版5 大手調査



トレンチ 2 土層堆積



1・2号石列



トレンチ 3



1号石塁石積・3号石列



4号石列



トレンチ 4

図版 6 大 手 調 査



遺構養生状況



無名曲輪トレンチ1



無名曲輪トレンチ2



作業風景



1号土塁



土層堆積状況



1号堀



2号土壁



トレンチ2土層堆積



6号溝

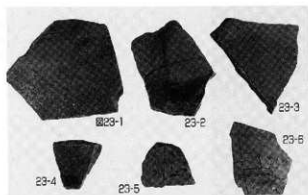
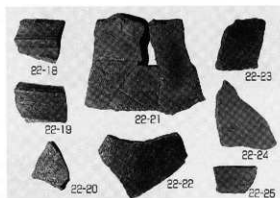
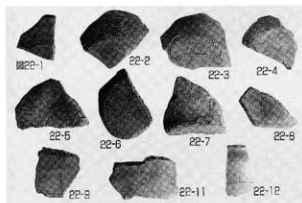
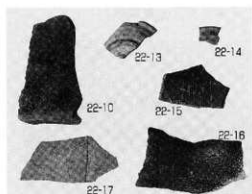
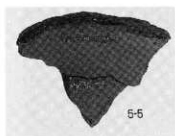
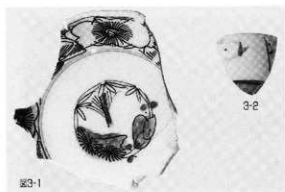


石積遺構

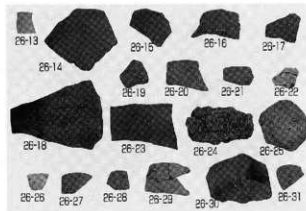
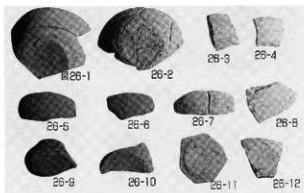
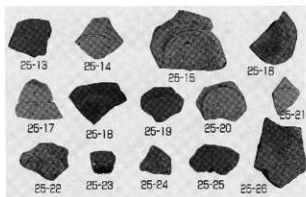
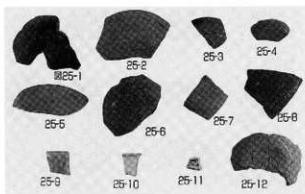
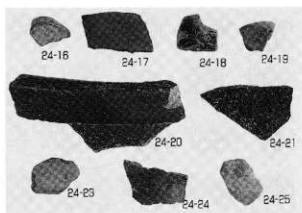
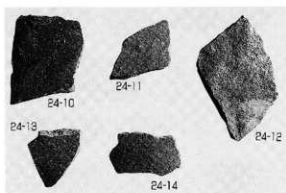
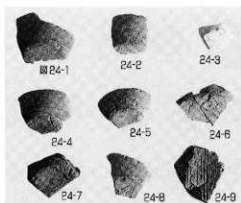
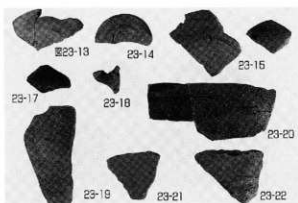


調査参加者

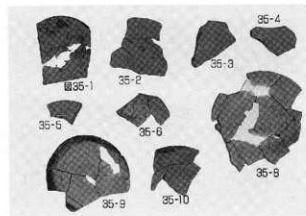
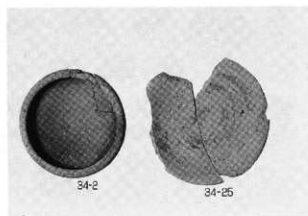
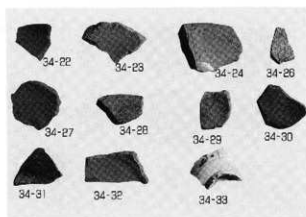
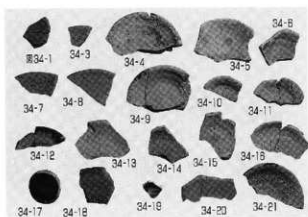
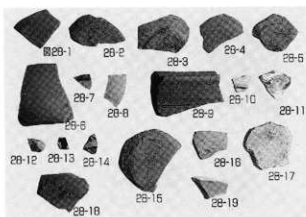
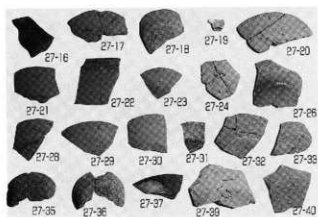
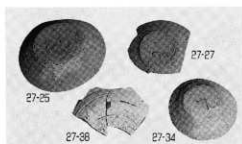
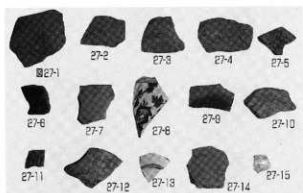
図版8 無名曲輪調査



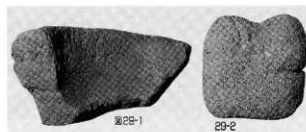
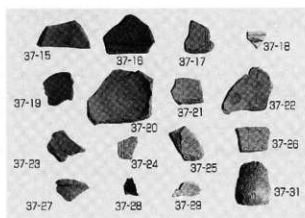
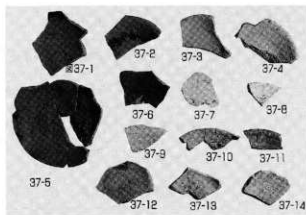
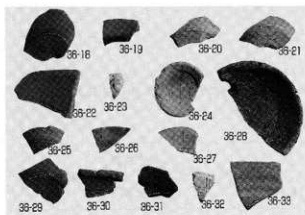
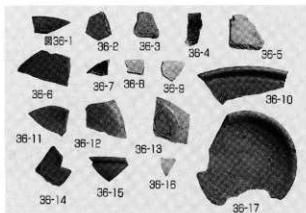
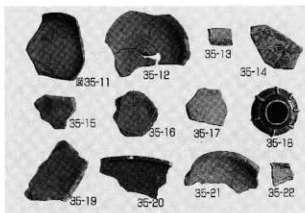
图版9 出土遺物(1)



図版10 出土遺物(2)



図版11 出土遺物(3)



图版12 出土遺物(4)



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきたけだしやかたあと						
書名	史跡武田氏館跡						
副書名	平成12年度大手馬出土壘・主郭部・御隠居曲輪南、 平成12～13年度無名曲輪、試掘調査概要報告書						
巻次	IX						
シリーズ名	甲府市文化財調査報告						
シリーズ番号	20						
編集機関	甲府市教育委員会						
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号 電話 055(223)7324						
発行年月日	平成14年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
たけだしやかたあと 武田氏館跡	山梨県甲府市 古府中町 屋形三丁目 大手三丁目	19201	01110	35° 40' 58"	138° 34' 50"	20000727 ～ 20010620 459.3㎡	史跡保存整備 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
武田氏館跡	城館跡	中世	石壘、土壘、堀、 溝、据立柱建物	かわらけ、瀬戸美濃、 染付			

甲府市文化財調査報告20

## 史跡 武田氏館跡 IX

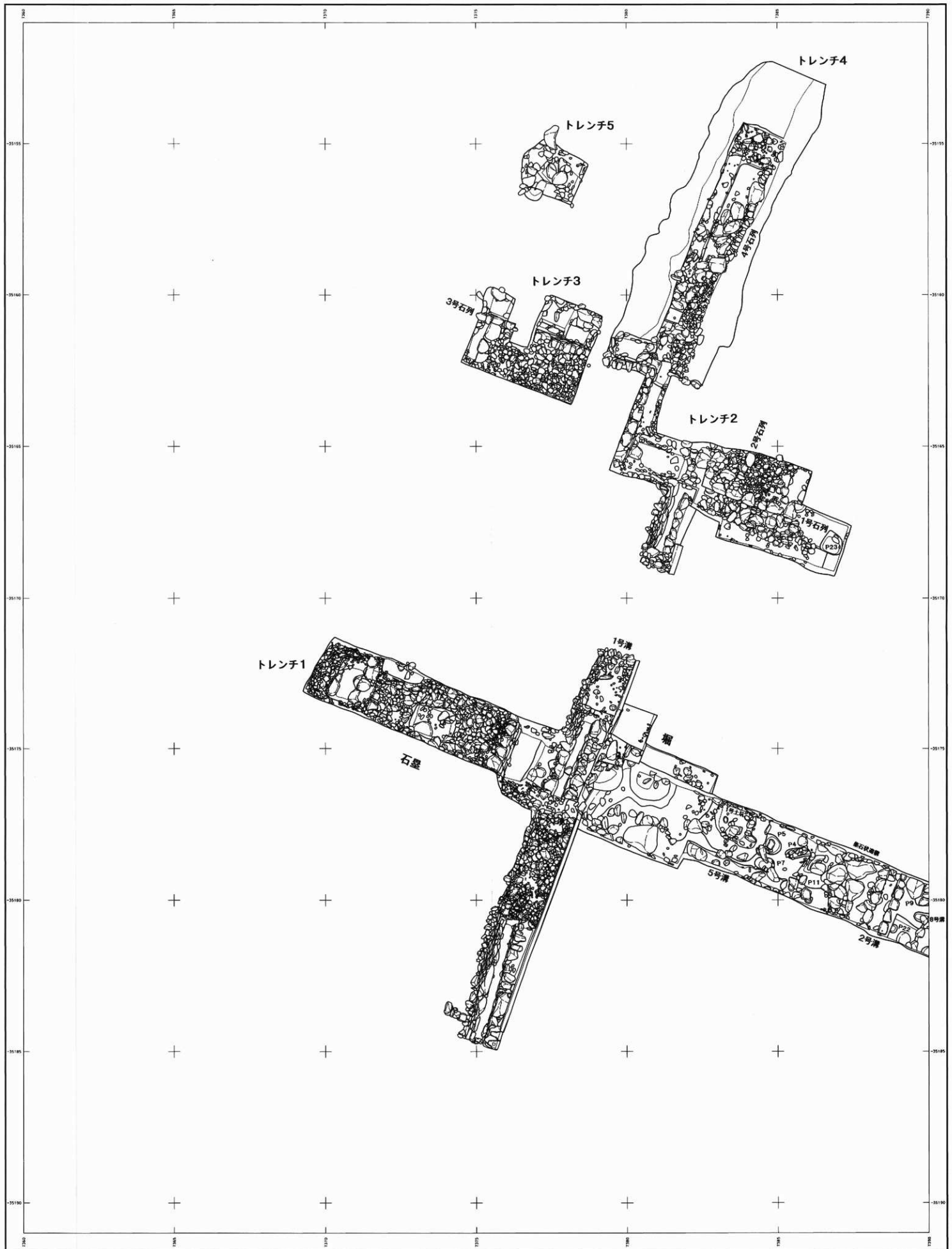
平成12年度大手馬出土壘・主郭部・御隠居曲輪南、  
平成12～13年度無名曲輪、試掘調査概要報告書

平成14年3月25日

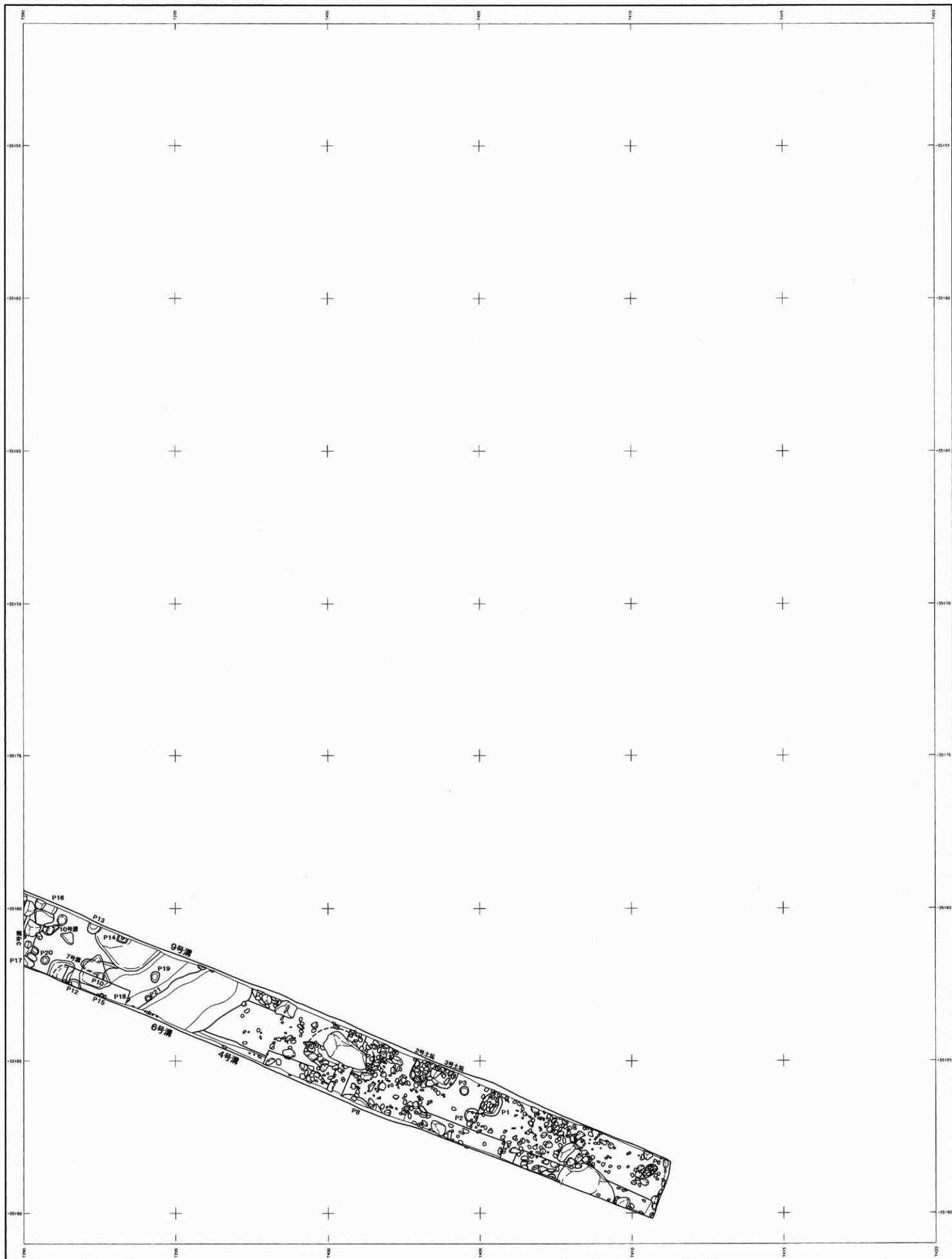
発行 甲府市教育委員会  
〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号  
TEL 055 (223) 7324  
FAX 055 (226) 4889

印刷 鶴内田印刷所  
〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18

史跡武田氏館跡大手馬出地点平面図 No. 1



史跡武田氏館跡大手馬出地点平面図 NO. 2



1 2

S=1:80  
0 2 4 m

